

被災シナリオの作成及び被害様相の作成方針

1 第3回委員会のご指摘と対応

2 シナリオのフレーム

2-1 地域区分

2-2 時間推移

2-3 シナリオ作成数

2-4 シナリオの表現形式

◆なぜ、「13人の物語（シナリオ）」を読む必要があるのか？

3 シナリオの具体化

◆まず覚えてください：地震発生直後の〈居場所〉と「命を守る」行動のイメージ

3-1 人物像・場面設定

3-2 シナリオ展開イメージ

3-3 シナリオ内容

(参考資料) 現地写真

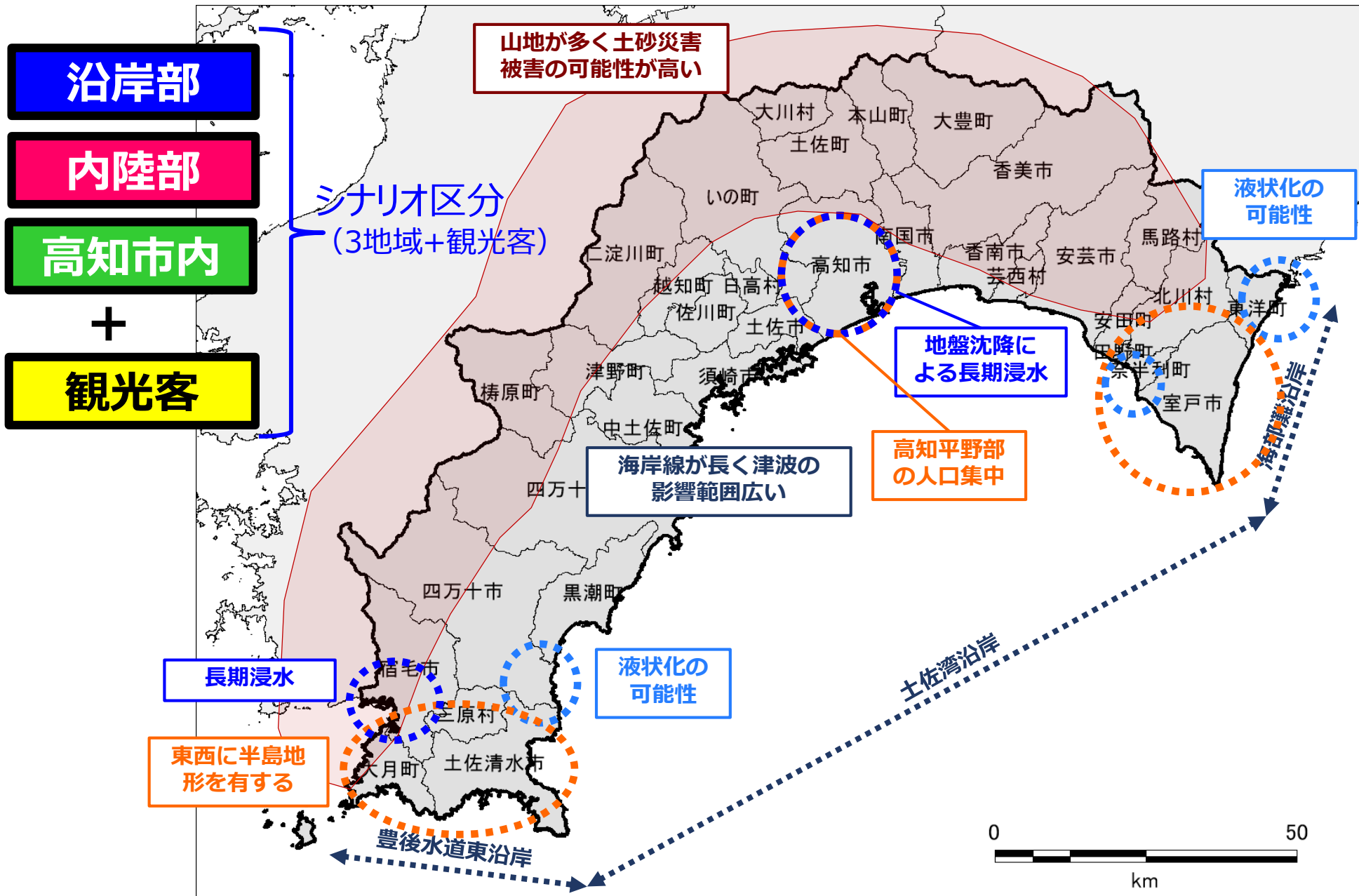
1 第3回委員会のご指摘と対応

項目	第3回での報告内容	ご指摘	課題	対応
フレームワーク	「命を守る、繋ぐ、立ち上げる」の時系列を想定してシナリオを作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・命を守る、繋ぐ、立ち上げるっていうのが、この通りになるかどうかという保証はないので、目安ということがわかるように発信いただきたい。 ・L1だと早くこちらを進めることができる可能性もあるし、大変な事態になれば遅れていくということも十分にあり得るので、留意いただきたい。 ・被害想定のエビデンスと被災シナリオが相互に補強しあうようにとりまとめをしていただきたい。 	<p>「命を守る、繋ぐ、立ち上げる」ことは目安であることがわかるように示す。</p> <p>いろいろな事態が起きる可能性があることに留意する。</p> <p>被害想定とシナリオが補強しあうように整理する。</p>	この3つのステージに沿ったシナリオ展開とする。
シナリオの主体	住民、事業者、行政機関を主体とする	<ul style="list-style-type: none"> ・主体の中に観光客は入れないといけない。 ・観光客も国内の一般の人とクルーズと、お遍路さんと区別をして書いとかないといけない。 	被災シナリオの主体に観光客等を入れる	地域3区分の他に、観光客の区分を設定した。
想定項目	-	・非常に暑い、非常に寒い是非考慮いただきたい。	非常に暑い、寒い状況を想定したシナリオを考える。	一部のシナリオに採用した。
複合災害	風水害を含めた複合災害について考慮する	・感染症、気象気候に関しても、ハザードとして捉えて考えてはどうか。	複合災害として、感染症を入れ込む。	考慮する。
地域特性	津波被害が主体の沿岸部、土砂災害が多い内陸部、人口密集地の高知市周辺の3区分を想定する	・沿岸部は、高知の場合では、山付きの場所も多いので、特にこの沿岸部については二つ分けた方がよい。	地域特性について、沿岸部は山付きのところで、そうでないところを区別する。	一部のシナリオに採用した。
想定項目	-	・カムチャッカの地震が起きた後、近くの火山が噴火したりしている。高知では噴火してもおかしくない山々は九州の側にはあってそんなに離れているわけではないので、全くなしでいいのかどうかは、一度検討いただきたい。	九州地域の火山の影響について検討する。	九州の火山の整理と南海トラフで発生する地震とそれらの発生状況を整理する。 シナリオの中でどのように記載するのか引き続き検討。
ライフライン	-	<ul style="list-style-type: none"> ・長期浸水した時の消防の状況など、高知県と高知市で一度協議した上で、ライフライン事業者の方々とも相談し、可能であれば、オブザーバーとかで参加いただくのはどうか。 ・消防広域化の移行期における被害影響も考慮した方がよい。 	高知市、ライフライン事業者、消防などについて、相談する。	まずは高知県と高知市で長期浸水時のシナリオとその対応について協議する。 さらに、ライフライン事業者にも対応について協議する。
地域特性	-	<ul style="list-style-type: none"> ・中山間部にお住まいの方には、大災害が起こった時の対応の遅れについて、注意しておいていただきたいのでそういったことについても考慮する。 ・中山間部は起きた後なかなか支援ができないので、起きる前にどういった手厚い事前防災をするかが鍵を握ると思う。 	中山間部における大災害時の対応について検討する。	中山間地域のシナリオも4本作成。

2 シナリオのフレーム／ 2-1 地域区分

シナリオは<3つの地域区分>に、<観光客>を加えた、計4区分をベースにする。

▼高知県における災害の地域特性



2-2 時間推移

シナリオは、下記の時間区分で展開し、課題や対応策を「高知県南海トラフ地震対策行動計画」と連動できるようにする。

	～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
災害発生後のステージ※	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
高知県南海トラフ地震対策行動計画の区分※	命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣		生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場	
被災シナリオ (3地域+観光客 =4区分) 何が起こるか (事象や様相)	この時間軸の5段階が、「高知県南海トラフ地震対策行動計画」にあり その記載を参考に、今回の「被害想定」や「能登半島地震の被害」を踏まえた肉付け。				
もし対策や対応をしなかったら	もし対策や対応を（上記のシナリオのように）しなかった場合の状況を提示 (対策や対応の必要性を啓発する)				

※経過時間の区分は、仮の設定

2-3 シナリオ作成数

4つの区分について、それぞれ3~4の人物を設定し、計13のシナリオを作成する。

区分	人物設定	時間				
		~1日	~3日	~2週間	~1ヶ月	1ヶ月以降
沿岸部	①	シナリオ①				
	②	シナリオ②				
	③	シナリオ③				
内陸部 (中山間地)	④	シナリオ④				
	⑤	シナリオ⑤				
	⑥	シナリオ⑥				
	⑦	シナリオ⑦				
高知市 周辺	⑧	シナリオ⑧				
	⑨	シナリオ⑨				
	⑩	シナリオ⑩				
観光客	⑪	シナリオ⑪				
	⑫	シナリオ⑫				
	⑬	シナリオ⑬				

地

2-4 シナリオの表現形式

今回は②のストーリー型を主体に、部分的に③の選択型（分岐）を挿入する形式とする。

形式	概要	特徴や課題
①項目別の タイムライン型	<ul style="list-style-type: none"> 被害状況、ライフラインの復旧状況、避難所生活、自宅避難生活など、被害想定を項目別に、タイムライン形式で様相をとりまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> パンフレットにでき、容易に手に取って読んでもらえる 文字だけでなく、写真やイラストなどを活用し、視覚的に災害の様相や対策が把握できる 住民向けには1枚の紙面（最大A3）に収めることが多く、掲載情報は限られる
<p>基本的には、防災の準備や対策が行われていることを示唆するストーリーを描く （対策が行われていない場合、被災が深刻になり、ストーリーが止まるため）</p>		
②ストーリー型	<ul style="list-style-type: none"> 登場人物（家族等）をモデル設定する。様々な条件（場所、主人公、状況）を選ぶことで、被害の状況を物語り風に説明する 	<ul style="list-style-type: none"> 「主体」と「場面」を選択することによって、様々な被害の状況や防災行動をイメージしやすい 読み物で文字が多いと、意識の高い人など見る人が限られる可能性があり、絵や動画などの分かりやすい工夫が必要 モデル設定が、自分と大きく異なると、自分事として受け止めにくい。
<p>※ただし、ストーリーの比較対象として、（分岐的に）準備や対策が行われなかった場合の状況をイメージさせる記載を挿入する。</p>		
③選択型 （分岐型）	<ul style="list-style-type: none"> 自身の状況に合わせて、双六のように、シナリオが分岐できる形 	<ul style="list-style-type: none"> 自身に合った個別の被害想定を知ることができ、被害の状況や防災行動をイメージしやすい 分岐点の設定の絞り込みが必要 住民向けホームページで、最初に条件入力し、すぐに想定シナリオが出るものもある

◆なぜ、「13人の物語（シナリオ）」を読む必要があるのか？

～ 想像力のスイッチを入れ、あなたと大切な人を守る力に変える ～

この資料では、4つの区分で計13人の被災後の歩みを詳細に描いています。

- ①沿岸部：津波襲来への対応
- ②内陸部：道路寸断による孤立
- ③高知市周辺：長引く浸水と都市機能停止
- ④観光客：見知らぬ土地での被災

「自分には関係ない」と思える物語の中にこそ、あなたと家族の命を救うヒントが隠されています。

◆3つの「読む価値」

1. 「大切な誰か」の姿を重ねる

自分に当てはまらなくても、それはあなたの家族、隣人、友人の姿かもしれません。
「離れて暮らす親ならどう動くか？」
「近所のあの親子をどう助けられるか？」
⇒多角的な視点を持つことで、地域で助け合う具体策が見えてきます。

2. 「未来の自分」を予行演習する

災害はいつ、どこで起こるか分かりません。
・数年後、あなたも「高齢者」や「小学生の親」になっているかもしれません。
・旅行先で「観光客」として被災するかもしれません。
⇒立場を変えて疑似体験することが、将来の備えに直結します。

3. 一般論になりがちなことを「生きた教訓」に変える

「浸水」「孤立」といった抽象的な言葉を、生活レベルの困難として理解できます。
・トイレ、食事、情報の遮断、心の葛藤。
・物語だからこそ記憶に残り、いざという時の「判断の軸」になります。

**「自分ならどうするか？」
を語り合う、そのきっかけに！**

このシナリオに「正解」はありません。

読み終えた後、家族や仲間と

「うちの場合はどうだろう？」と話し合うこと。

その会話こそが、最強の防災訓練

になります。

3 シナリオの具体化

◆地震発生直後の〈居場所〉と「命を守る」行動のイメージ

	～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
命を守る	命を守る	命をつなぐ	命をつなぐ	命をつなぐ	命をつなぐ
居場所	命を守る (想定シナリオ)	命をつなぐ	命をつなぐ	命をつなぐ	命をつなぐ

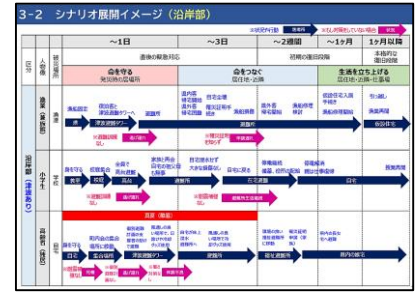
自分の居住地（自宅）と地震発生時の〈居場所〉は異なる場合があるため、「命を守る」行動をイメージするための資料。

3-1 人物像・場面設定 (案)

区分	人物像	場面設定
観光客	観光客 (外国人)	観光客 (外国人)
	小学生	小学生
	高齢者	高齢者
住民	会社員	会社員
	主婦	主婦
	学生	学生
高齢者	高齢者 (単身)	高齢者 (単身)
	高齢者 (夫婦)	高齢者 (夫婦)
	高齢者 (家族)	高齢者 (家族)

3地域+観光客 = 4区分を設定し、各区分 3～4 (計13) のシナリオについて、〈人物像〉や〈場面設定〉の概要を示したもの。

3-2 シナリオ展開イメージ



計13のシナリオ (被災ストーリー) の展開イメージを、時系列で示したもの。

3-3 シナリオ内容

	～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
命を守る	命を守る	命をつなぐ	命をつなぐ	命をつなぐ	命をつなぐ
命をつなぐ	命をつなぐ	命をつなぐ	命をつなぐ	命をつなぐ	命をつなぐ
生活を取り戻す	生活を取り戻す	生活を取り戻す	生活を取り戻す	生活を取り戻す	生活を取り戻す

3-2の計13のシナリオ展開イメージを、具体的に記載したもの。
※下段に、対策 (対応) をしなかった場合に想定される状況を記載。

◆まず覚えてください！：地震発生直後の<居場所>と「命を守る」行動のイメージ

どこで被災するかはわからない（自宅ではないかもしれない）。それぞれの居場所の「命を守る」行動をイメージしておくことが重要。

	～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
	命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣		生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場	

居場所		命を守る（想定シナリオ）
沿岸部	津波あり	<p>①近くに津波避難タワーや津波避難ビルがある 即座に垂直避難：出来る限り早く、最寄りの施設へ駆け上がる。「逃げ遅れ」は死に直結するため、荷物は持たず、靴を履いたまま避難する。上層階へ移動：想定される津波高より一段でも高い場所を目指す。冬場や夜間は防寒が命綱となるため、備え付けの備品（毛布等）を使用。</p> <p>②タワーやビルは無いが、近くに高台がある 「最短距離」で高台へ：道路が亀裂で通れない可能性を考慮し、あらかじめ決めた避難路や、斜面を駆け上がる。 二次災害への警戒：余震による土砂崩れに注意し、安全な高所で待機する。津波は何度も押し寄せるため、1日目は絶対に下に降りない。</p>
内陸部	県道閉塞 で孤立	<p>土砂災害からの回避：激しい揺れによる山崩れ・地滑りから身を守る。斜面から離れた頑丈な建物、または開けた平地へ移動する。 近隣共助：道路が寸断され、救助は数日間来ないことを前提に行動。近隣で声を掛け合い、安否確認と救助活動を住民のみで行う。 資源の温存：地域の公民館等に備蓄がある場合は、孤立長期化に備え、1日目から計画的に水・食料・燃料を管理する。</p>
周辺 高知市	長期浸水 地域	<p>「3階以上」への垂直避難：地盤沈下により水が数週間引かないため、1階、2階は水没するリスクが高い。自宅が低層なら、直ちに近隣の「津波避難ビル」の3階以上へ移動。市内勤務者も自社ビルが堅牢なら3階以上へ。市内商店は津波避難ビルに客や歩行者を誘導。 孤立への覚悟：1日目のうちに、手元にある水や食料をできる限り上層階へ運び上げる。浸水が始まると移動は不可能。電力喪失、トイレの使用不能に対し、簡易トイレや非常用電源の準備を確認する。</p>
観光客	津波あり	<p>案内表示の確認：街中の電柱や路面にある「海拔表示」と「津波避難ビル」のマークを探し、即座に駆け込む。基本は「周囲の地元住民が逃げる方向」へ共に逃げる。 外国人対応：フェリーターミナル（高知港）では、目の前の高台へ「GO UP!」「RUN!」と叫びながら逃げる。ジェスチャーで高所を指し示す。高知市内では観光施設（高知城やひろめ市場等）のスタッフの誘導に従う。青色の「TSUNAMI EVACUATION」サインに従い、高い建物に入る。 お遍路さん（沿岸部の国道を歩く）：重い金剛杖やバックパックは命を奪う重荷になる。命を守るために最低限の貴重品以外は捨て、斜面を這い上がってでも「高さ」を確保する。国道のキロポスト（距離標）等で現在地を確認し、可能であれば110番や119番ではなく、家族等に「高所に逃げた」ことだけを短く連絡する（回線混雑回避のため）。</p>

(参考) 高知県の産業別就業者数 (R2)

単位：人，%

各年10月1日現在

	令和2年	平成27年	平成22年	割合 (%)		
				令和2年	平成27年	平成22年
産業別就業者総数 3)	344,704	351,335	335,775	100.0	100.0	100.0
第1次産業	34,801	39,081	40,623	10.1	11.1	12.1
農業，林業	31,457	35,287	36,559	9.1	10.0	10.9
(農 業)	28,867	32,226	33,652	8.4	9.2	10.0
漁業	3,344	3,794	4,064	1.0	1.1	1.2
第2次産業	58,334	60,025	57,251	16.9	17.1	17.1
鉱業，採石業，砂利採取業	367	431	407	0.1	0.1	0.1
建設業	28,947	29,588	27,855	8.4	8.4	8.3
製造業	29,020	30,006	28,989	8.4	8.5	8.6
第3次産業	251,569	252,229	228,825	73.0	71.8	68.1
電気・ガス・熱供給・水道業	1,626	1,727	1,417	0.5	0.5	0.4
情報通信業	4,267	4,145	3,571	1.2	1.2	1.1
運輸業，郵便業	12,780	12,763	13,468	3.7	3.6	4.0
卸売業，小売業	54,291	57,126	56,793	15.8	16.3	16.9
金融業，保険業	7,538	8,205	7,620	2.2	2.3	2.3
不動産業，物品賃貸業	4,740	4,632	3,998	1.4	1.3	1.2
学術研究，専門・技術サービス業	9,162	8,822	7,520	2.7	2.5	2.2
宿泊業，飲食サービス業	20,159	21,349	20,293	5.8	6.1	6.0
生活関連サービス業，娯楽業	11,705	12,445	12,220	3.4	3.5	3.6
教育，学習支援業	19,409	18,727	16,801	5.6	5.3	5.0
医療，福祉	63,569	61,292	50,132	18.4	17.4	14.9
複合サービス事業	5,410	5,609	4,332	1.6	1.6	1.3
サービス業(他に分類されないもの)	18,791	17,989	15,494	5.5	5.1	4.6
公務(他に分類されるものを除く)	18,122	17,398	15,166	5.3	5.0	4.5
分類不能の産業	-	-	9,076	-	-	2.7

資料：総務省統計局「国勢調査」

出典：高知県統計書（令和6年）

3-1 人物像・場面設定 (案)

区分		人物像				場面設定				
		職業他	年齢	性別	特徴・家族構成	被災場所	追加状況	ストーリーの強調点	対策有無の例示	
沿岸部	津波あり	① 漁業 (兼旅館)		70	男	夫婦2人	漁港		漁船の固定、宿泊者の誘導、避難所生活、	避難訓練、罹災証明の知識
		② 小学生		7	男	父・母・姉・祖父母	学校	山付き	高台避難、家族との連絡、在宅避難	避難訓練、耐震補強
		③ 高齢者		90	女	1人暮らし	自宅	真夏	要援助、個別避難計画、津波避難タワー	個別避難計画、暑さ対策
内陸部 (中山間地)	県道が閉塞し孤立	④ 農業		60	男	夫婦・母親	畑	真冬	県道閉塞、裏山崩壊恐れ、近隣宅避難	地域内訓練、備蓄、共助
		⑤ 公務員		30	男	妻・乳児1人	自宅		繁忙、交代勤務	耐震補強、参集訓練、交代勤務制
		⑥ 建設業		45	男	妻・子供2人	会社		道路啓開、BCP、交代制、自治体との連携	BCP、自治体との調整
		⑦ 高齢者		80	女	1人暮らし	自宅	負傷 感染症	応急手当、感染症対策、診察	地域内訓練、医療救護訓練、感染症対策
高知市周辺	長期浸水地域	⑧ 会社員		45	男	夫婦・父親 (足が不自由)・高校生	オフィス		垂直避難、帰宅困難、家族安否	什器固定、備蓄、救出
		⑨ 商店 (中心部)		50	男	夫婦	商店街		避難誘導、津波避難ビル、情報提供、商店街再開	避難誘導、非常用、持ち出しバッグ、事前の復興・再建計画
		⑩ 高齢者		85	女	1人暮らし	自宅	真冬	自宅垂直避難、個別避難計画、ボートによる救出	垂直避難、毛布、個別避年計画

3-1 人物像・場面設定 (案)

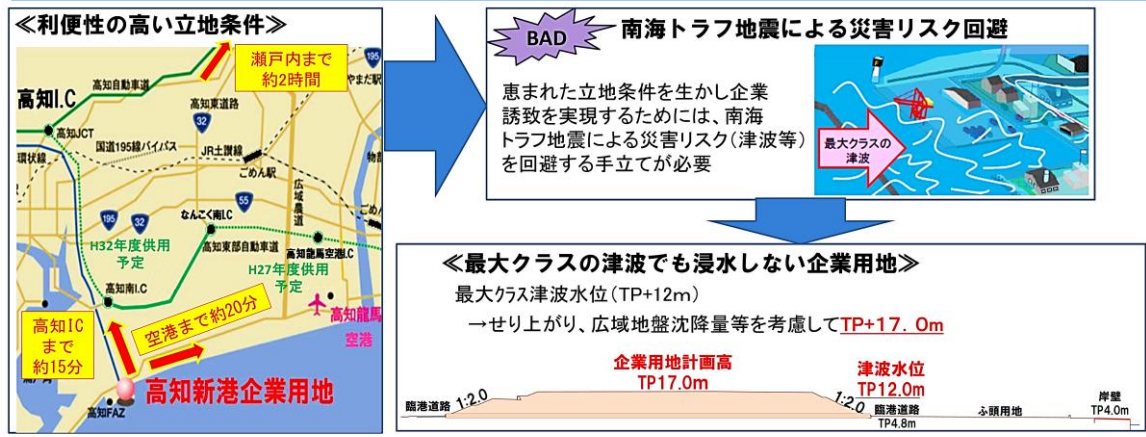
区分	人物像					場面設定			
	NO	職業他	年齢	性別	特徴・家族構成	被災場所	追加状況	ストーリーの強調点	対策なし検討
観光客 <small>津波浸水あり</small>	⑪	国内観光客 	30	女	友人と2名で旅行	はりまや橋		店舗・市民の誘導、津波避難ビル、その後の受け入れ先	声掛け誘導、一時避難後の受入施設情報
	⑫	クルーズ船乗客※ 	65	女	外国人夫婦	高知新港客船ターミナル		港内高台避難、クルーズ船沖合避難	声掛け誘導、情報提供
	⑬	お遍路さん 	62	男	1人	沿岸部国道		地元民の誘導、津波避難タワー、その後の受入先	声掛け誘導、一時避難後の受入施設情報

※高知港へのクルーズ船寄港は、令和7年度（今後の予定も含め）、108回（およそ3日に1回）。
 出典：<https://www.pref.kochi.lg.jp/doc/cruise7/>

高知新港整備×高台企業用地造成×優れた立地条件
 = 企業誘致による産業活性化・災害対応力の強化



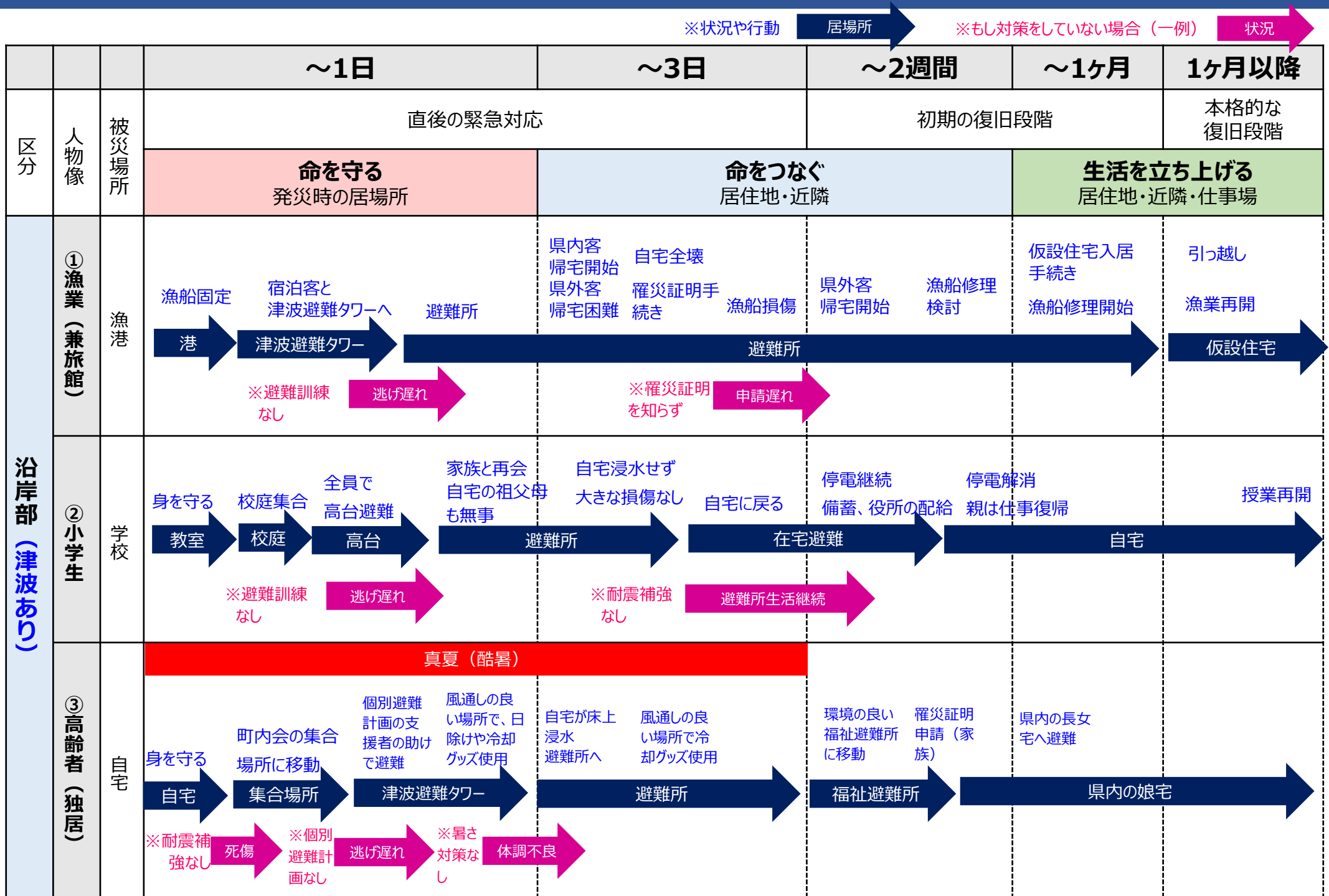
交通の利便性に恵まれた立地条件に最大クラスの津波でも浸水しない安全性が加わる



▲高知新港における高台整備

出典：https://www.pref.kochi.lg.jp/doc/2015061000096/file_contents/kouwann_takadai150610.pdf

3-2 シナリオ展開イメージ (沿岸部)

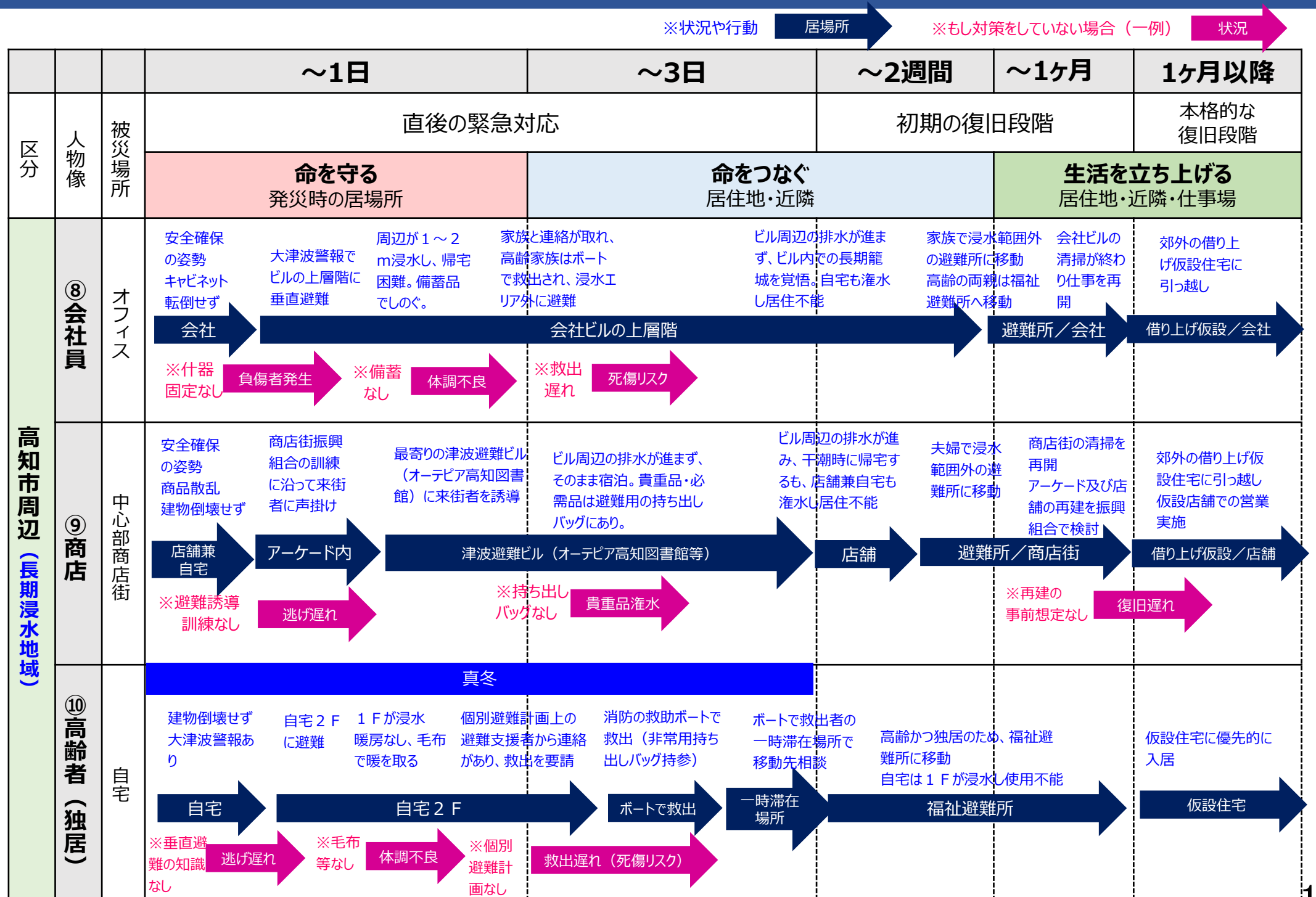


3-2 シナリオ展開イメージ (内陸部)

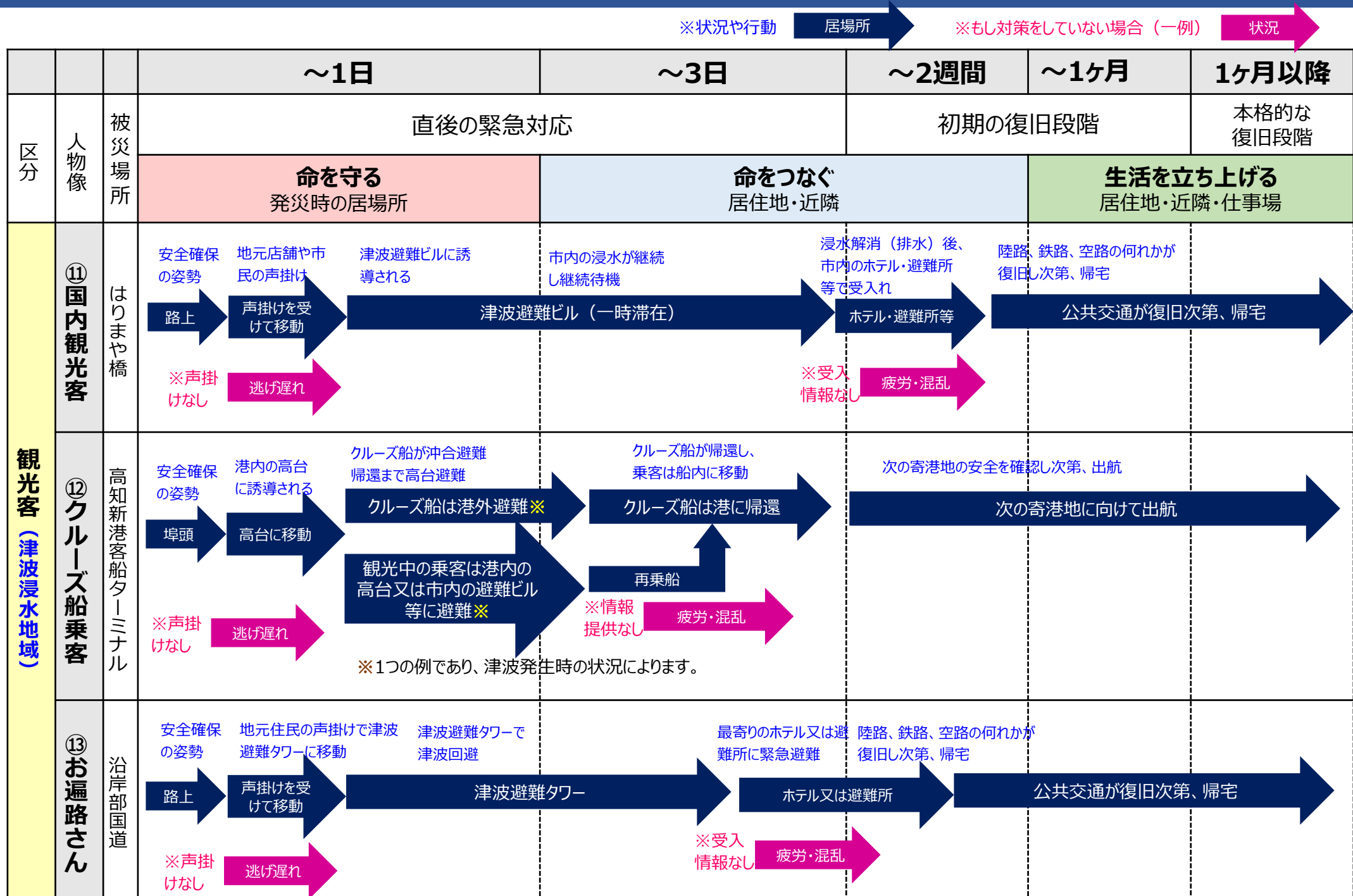


			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降	
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応			初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る発災時の居場所			命をつなぐ居住地・近隣		生活を立ち上げる居住地・近隣・仕事場
内陸部 (中山間地域) (県道が閉塞し孤立)	④ 農業	畑	<p>安全確保の姿勢</p> <p>自宅に戻る家は若干の損壊で済む 近隣安否確認</p> <p>真冬</p> <p>県道が斜面崩壊で閉塞、孤立状況に。備蓄品で暖を取る</p> <p>畑 → 自宅</p> <p>※地域内訓練なし</p> <p>負傷者見落とし</p> <p>※備蓄なし</p> <p>体調不良</p>	<p>訓練どうり、集落で相互に声掛け。備蓄品確認。余震で裏山崩壊の恐れ ⇒ 近隣宅に移動</p> <p>集落内近隣宅</p> <p>※地域内共助なし</p> <p>斜面被災の恐れ</p>	<p>斜面応急対策終了、県道通行可能。 ⇒ 避難所に移動</p> <p>避難所</p>	<p>停電解消したため、自宅に戻る。</p> <p>自宅</p>	<p>農業を徐々に再開</p>	
	⑤ 公務員	自宅(休日)	<p>安全確保の姿勢</p> <p>自宅は倒壊等問題なし。マニュアルに沿って出勤準備。</p> <p>自宅 → 自宅(出勤準備)</p> <p>※耐震補強や対応訓練なし</p> <p>出勤不能又は出勤遅れ</p>	<p>県道が斜面崩壊で閉塞 避難所開設 仮眠を取りながら2交代で24時間稼働</p> <p>役場・現場・避難所等</p> <p>※交代勤務の準備なし</p>	<p>一日後に帰宅 10時間休息</p> <p>自宅</p> <p>長時間勤務による疲弊</p>	<p>県道通行可能になるまで 3交代で勤務</p> <p>役場/自宅</p>	<p>停電も解消し、交代勤務も解消</p> <p>役場/自宅</p>	
	⑥ 建設業	会社	<p>安全確保の姿勢</p> <p>BCPに従って行動</p> <p>会社から体制説明</p> <p>会社に泊まる</p> <p>会社</p> <p>※BCPなし</p> <p>初動の遅れ</p>	<p>道路啓開作業</p> <p>自治体と連携</p> <p>家族は避難所</p> <p>現場と会社</p> <p>※協力企業との事前調整なし</p> <p>業務中断</p>	<p>道路啓開継続</p> <p>リソース確保の困難</p> <p>現場・会社・避難所</p> <p>※行政との連携なし</p> <p>復旧遅れ</p>	<p>道路が徐々に通行可能</p> <p>家族も自宅に戻る</p> <p>仮設住宅確保本格化</p> <p>現場・会社・自宅</p>		
	⑦ 高齢者(独居)	自宅	<p>屋外に飛び出す</p> <p>屋根瓦の落下で負傷 自宅も半壊 隣人の車で移動</p> <p>自宅</p> <p>※地域内訓練なし</p> <p>負傷者見落とし</p>	<p>県道が斜面崩壊で医師来らず、看護師の応急手当</p> <p>医療救護所</p> <p>※医療救護訓練なし</p> <p>手当なし</p>	<p>隣人の助けで避難所に移動 感染症対策で受入密度を下げる</p> <p>避難所</p> <p>※感染症対策なし</p> <p>感染リスク大</p>	<p>福祉避難所の開設に伴い移動</p> <p>福祉避難所</p> <p>斜面応急対策終了、県道通行可能。 医師の診察受ける</p>	<p>罹災証明申請(家族)</p> <p>県内の息子宅へ避難</p> <p>県内の息子宅</p>	

3-2 シナリオ展開イメージ (高知市周辺)



3-2 シナリオ展開イメージ (観光客)



3-3 シナリオ内容 ①漁業兼旅館 【沿岸部（津波あり）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
沿岸部 (津波浸水地域)	①漁業 (兼旅館)	漁港	<p>港の朝仕込み中、突き上げるような揺れに膝をつき、鍋や食器が床を転がる。停電で厨房は真っ暗、ラジオの警報に促され従業員と宿泊客へ一斉声掛け。旅館建物は一部損壊し、水槽が割れて足元が滑る。駐車場は亀裂で車が使えず、徒歩で避難タワーへ。途中、要支援の宿泊客を背負い、互いに腕を取り合って階段を駆け上がる。海が引き、黒い筋のような波が戻って港を呑み、船団と桟橋が押し流されるのを見て言葉を失う。炎天下で水分を分け合い、宿泊客名簿で所在確認を続けながら夜を迎えた</p>	<p>タワー上で宿泊者名簿の照合で一名の所在が不明、商店街側へ避難した可能性を記録し、タワーの掲示板に連絡先を書き残す。 下からは排水の遅れで悪臭が上がり、簡易トイレに長い列。食料は乾パンと即席味噌汁で済ます。 水の入手は困難。宿泊客の不安を抑えるため、時間を決めて情報共有・体操・水分補給を回すルーティンを導入。 夜間は蚊と蒸し暑さで眠れず、足のストレッチを続ける。港の状況は壊滅的との情報が入るが、全員の安全確保を最優先に、翌朝の避難所移動に備え、タワー上で班分けを行った。</p>	<p>旅館とは少し離れたところにある自宅は全壊していた。避難所に移り、体育館の床で雑魚寝する。名簿と旅館予約システムのバックアップ紙を持参し、宿泊客の家族連絡に活用。 役所の職員や地域の人と協力し、衛生管理のため手洗い・発熱チェックの動線を作り、濡れた衣類の干場を確保。炊出しで温かい汁物が配られ、久しぶりの湯気に目頭が熱くなる。 被害写真の確認で旅館の一階が泥に埋まり、厨房機器は全損と判明。漁業組合から船の係留具流失・修理待ちの連絡。 役所に罹災証明の申請に行き、後日仮設住宅の申請に着手。また、旅館従業員の生活再建の相談窓口を共有。 夜は余震に備えて避難袋と靴を枕元に置き、まだ帰宅できていない宿泊客の体調記録をつけ続けた。</p>	<p>仮設住宅の入居手続きをする。旅館再建のため、被害写真と罹災証明、見積、資金計画のファイルを作成。近隣の宿泊業者と情報交換会を開き、共同で客室清掃機材の共同購入や共同宣伝の原案を作る。漁船の修理の依頼を行なう。港の泥上げと道路の応急補修が進み、仕入れ先との連絡も再開。従業員の再雇用方針とシフト原案を作り、心身のケア日を設定。地域の祭りの代替イベント案を町内会と調整し、来訪者受け入れの安全基準を文書化。 夜は旅館修理の図面に目を通し、工期と仮設営業の両立案を練る。</p>	<p>仮設住宅に引っ越し、ようやく安心して寝られるようになる。自宅は、瓦礫撤去と消毒が進み、更地化へ。再建修理の設計打合せで耐水・耐震の仕様にする。旅館も、耐震・耐水仕様にし、非常電源、可搬式冷蔵設備、避難誘導サインの配置を強化。漁業は小型船の修理が終わり、朝の安全点検表を導入。旅館の仕入と予約は分散管理し、紙とクラウドの二重記録。地域の体験型プログラム（港ガイド、震災の教訓展示）を企画して安全教育も兼ねる。 現金流は厳しいが、月次の損益予測と資金繰り表を更新し、返済計画と助成申請の進捗を週次で管理。 季節の受け入れ人数を絞り、避難計画を宿泊者とチェックイン時に共有して運営を再開する。</p>
			もし対策をしなかったら	<p>●もし宿泊客への初動の避難誘導や要支援者の同行支援をしなかったら津波に巻き込まれて重傷・死亡の危険が高まっていた</p> <p>●もし漁港から離れて避難タワーへ早期移動しなかったら⇒漂流物や火災に巻き込まれて身動きが取れなくなった。</p>	<p>●もし水分補給・暑熱対策（時間管理での補給・日陰確保）を怠っていたら熱中症や失神で介助不能になっていた</p> <p>●もし衛生管理（簡易トイレの行列整理・手洗い動線）を整えなかったら下痢・皮膚炎などの感染リスクが増大していた</p>	<p>●もし罹災証明のこと（写真・名簿・被害記録）を知らなかったら補助申請や再建資金の確保が遅れ、営業再開が困難になっていた</p> <p>●もし宿泊客の安否連絡体制を作らなかったら所在不明者対応が長期化し、風評とクレームが増えていた</p>	<p>●近隣の宿泊業者と情報交換会を開かなかったら希望も失い、復旧する術を失った。</p> <p>●もし仮設住宅や従業員の住まいの確保情報を確認しなかったら従業員離職が進み、人手不足で復旧が停滞していた</p>

3-3 シナリオ内容 ②小学生 【沿岸部（津波あり）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
沿岸部 (津波浸水地域)	②小学生	学校	<p>授業前の教室で大きな揺れが来て、机の下に入る。校庭は地面が波打つように揺れ、先生の笛でしゃがみ込む。鉄棒が鳴り、砂場に砂煙。教室では本棚の本が落ちるが、先生の声に従いヘルメット着用。揺れが収まると、全員校庭に集まり、今まで行って来た訓練どおり、誘導旗に沿って高台へ列で移動。靴が脱げた友だちの手を取り、転ばないように肩を貸す。海側は白く泡立ち、潮が不自然に引くのが見える。高台に着いて点呼。背中防災ずきんが汗で重くなるが、みんなで水を分け合い、先生の話の静かに聞いた。点呼は名簿順ではなく列の順に変更し、抜け落ちを防ぐ。連絡カードで、先生が保護者連絡先を確認。</p>	<p>津波の水が引いた後、大きな被害を免れた学校に戻る。非常食はビスケツと水、トイレは体育館前に簡易型が設置。連絡がついた家庭は在宅避難、海側の家庭は避難所である体育館へ。家族の迎えが無い児童は、寝袋を並べ、先生が見回り。勉強道具は濡れたが、ノートの乾いたページに避難の記録を書き、クラス日誌を作る。友だちが不安で泣き出すと、先生が読み聞かせと軽い体操で気持ちを落ち着かせる。保護者と再会できた子から順に明日の移動計画を聞き、連絡カードの情報を更新した。クラス日誌には絵と言葉の両方で記録。水筒の補給は列を作らず班ごとに時間割。避難所の騒がしさを避けるため、図書コーナーを段ボール仕切りで作った。</p>	<p>自宅は事前に補強をしてあったので、倒壊せず、在宅避難することになった。4日目になっても停電は継続し、用意していたランタンや小型の蓄電池を使用。携帯は、非常用の手回し充電器で何とか充電できた。自宅近隣の避難所には子どもスペースが作られる。絵を描く机、折り紙、ボールなどあり。そこで、朝の短い時間に学校から配られたプリントで復習。手洗い場に列ができるので、班ごとに当番を決めて衛生管理。学校再開に向け、通学路の安全確認が進み、今後の集合場所を地図に書き込んだ。通学路マップに危険箇所印を赤×で記載し、雨天時の迂回路も青線で追記。</p>	<p>3週間後を経て、クラスの友だちの一部は、仮設住宅や親戚宅からの通学が始まる。名札を新しく作る。教室は机の配置を変え、余震に備えて、落下防止の固定が強化された。避難訓練の振り返りを授業で行い、家族の連絡方法や集合場所を家庭で話し合う宿題が出る。友だちの家の片付けを手伝うボランティア活動も計画され、地域の人たちと顔を合わせた。家庭科の時間に非常持ち出し袋を点検し、乾電池の型番と本数をカードに書いた。</p>	<p>1ヶ月以降、学校が授業や行事を一部縮小する形で再開。地域に防災クラブができ、学校でも、避難経路をポスターにまとめた。校外学習は、高台避難の訓練を兼ねた、自然観察になる。心配事を伝えるための相談箱が廊下に置かれ、先生が毎日チェック。家庭では家具の固定と非常食の入れ替えを実施し、それを学習ノートに記録した。地域の避難訓練に親子で参加し、笛や懐中電灯の扱いを練習。ゆっくりと元の生活に近づきながら、非常時に備える習慣が身についた。防災クラブのポスターは廊下の低い位置にも掲示し、低学年でも読めるようふりがなを追加。</p>
			もし対策をしなれば	<ul style="list-style-type: none"> ●もし津波の避難訓練をしていなかったら 説明や理解に時間がかかり、津波で死傷する危険があった ●もし保護者の連絡カードを用意していなかったら 保護者の連絡先（携帯番号など）がわからず、安否の連絡が遅れた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし水分補給・休憩の時間割を守らなかったら 脱水や熱中症で体調を崩していた ●もし衛生動線（手洗い・トイレ）を守らなかったら 感染症がクラス内で広がった 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし自宅の耐震補強をしていなかったら 建物が全壊又は半壊して、避難所生活することになった ●もし停電時の備えをしていなかったら 夜は暗く、様々な電気器具や携帯電話も使えなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし仮住まいからの通学計画を立てなかったら 遅刻や長距離歩行で疲労が蓄積した ●もし家の片づけのボランティア（地域の共助）がなかったら 地域の復旧復興に時間がかかり、各世帯が疲弊した。

3-3 シナリオ内容 ③高齢者（独居）【沿岸部（津波あり）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
沿岸部 （津波浸水地域）	③ 高齢者（独居）	自宅	<p>朝のテレビが消え、足元から突き上げる揺れで座り込み、食卓の下に潜る。壁や天井の一部が剥がれたが、建物の補強を3年前にしていたので、倒壊しなかった。戸棚は固定していたため倒れず。ラジオの大きな警報音に背を押され、杖をついて集合場所へ。途中で個別避難計画の作成時にお世話になった支援者の方に会い、背中を押されるように津波避難タワーの階段を上る。息が上がるが、上階の風が涼しく、日陰に腰掛けて水を受け取る。海が吠えるように近づき、集落に津波の水が押し寄せるのが見える。手の震えが止まらないまま、夕方の風の冷たさに肩をすばめた。メガネと薬袋を首から提げ、階段では一段ごとに深呼吸。手すりを両手で掴み、タワーの最上階に着いて、名簿に名前を書いた。</p>	<p>2日目、あせもが痛み、簡易トイレへの移動にも時間がかかる。支援者が腕を取り、休憩のタイミングを見してくれる。持病があることを伝えると避難所への移動計画に配慮が加わった。夜は蒸し暑く、うちわで風を送っても眠れない。配られた経口補水液で喉を潤し、足の痙攣を防ぐためゆっくりと足首を回す。津波の水が引き、道路が通れるようになった翌朝、役所の車で避難所へ移動する段取りが決まり、自宅経由で移動することになった。自宅は1Fの半分くらいまで浸水して1Fは目茶苦茶だったが、かろうじて上った2Fに避難用のバッグがあり、それを持ち出し、避難所に向かった。避難所では、トイレまでの距離を短くするため出入口近くに場所を確保したが、福祉避難所が開設されるとの話聞き、できれば移りたいと申し出た。</p>	<p>避難所では風通しの良い場所に席を作ってもらい、冷たいタオルで首筋を冷やす。発熱チェックに並び、薬の管理表を職員に渡す。自宅が床上浸水で住めないため、時々胸が締め付けられるが、罹災証明用に写真を撮ると手続きが進むと教わり、支援者をお願いして記録を残す。写真撮影は玄関・居間・台所の三点を基本に、床の水位痕も記録。福祉避難所への移動が決まり、荷物と薬をまとめて車に乗る。夜は扇風機の風に助けられ、ようやく眠りが戻ってきた。薬の仕分けは曜日別のケースに入れ、職員に服用時間の札を渡す。</p>	<p>福祉避難所は静かで、介護職員の声掛けに安心する。入浴の順番や食事時間が決まり、体力が戻るにつれて歩行練習を再開。娘から電話があり、今後の住まいの話をする。役所の窓口で罹災証明の申請書類を受け取り、支援者同行で提出。写真の印刷と家の片付けの段取りを相談し、必要な手続きのメモを枕元に置く。歩行練習は午前と午後の二回、杖の高さを見直し。連絡メモは大字で書いて枕元に貼り、電話番号は太字にした。3週間目に入り、福祉避難所を出て県内の長女宅で一時暮らすことになった。</p>	<p>娘の家に身を寄せ、通院と手続きの付き添いを受ける。自宅に戻る前に1Fを復旧する必要があり、その段取りを娘と一緒に検討する。娘の家付近の地域の見守りネットワークに登録し、連絡方法を確認。写真や書類が整い、支援金の手続きが進むにつれ、心が少し軽くなる。</p>
			<p>もし対策をしなれば</p> <ul style="list-style-type: none"> ●もし耐震補強をしていなかったら 自宅の倒壊で死傷していたかもしれない ●もし個別避難計画を作成していなかったら 支援者もなく、1人で津波避難タワーへ向かうため、津波に巻き込まれていたかもしれない ●もし真夏にタワーに水の備蓄がなかったら 避難はできても脱水症状を起こしていたかもしれない 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし非常用持ち出しバッグを1Fに置いていたら 津波の水で使えなくなったり、どこかに流されていたかもしれない ●もし福祉避難所の存在も知らず、移送を申出なかったら 一般避難所の暑さ・混雑で体調が大きく悪化したかもしれない 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし罹災証明の申請をしなかったら 住宅支援の優先度が下がり生活再建が困難になった ●もし自宅被害の写真記録を残さなかったら 被害認定で不利になった 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし受入先の確保と移動計画を立てなかったら 避難生活が長期化し健康を害した 	<ul style="list-style-type: none"> ●地域の見守りネットワークに登録しなかったら ・慣れない娘の家にいる時に、余震が来たら、避難に困るかもしれない

3-3 シナリオ内容 ④農業【内陸部（県道が閉塞し孤立）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
内陸部（中山間地域） （県道が閉塞し孤立）	④農業	畑	<p>畑の土が波打ち、足元の畝が崩れる。トラクターを止めて夫婦で身を屈め、頭を守る。裏山の斜面に土砂の割れ目が走り、落石の音。揺れが収まった後、軽トラックまで行き、ラジオを付けると、県道は斜面崩壊で閉塞との報道。閉塞の危険が少ない道で自宅に戻る途中、余震で電柱が揺れ、瓦が落ちる音に身をすくめる。家の柱は持ちこたえ、高齢の母も無事だったが、棚の瓶が割れて床が滑る。隣にあるビニールハウスに一時移動。停電と断水で、不自由を感じる。携帯はかろうじてつながり、高知市内にいる息子に安否を伝えた。</p> <p>ハウス内で、備蓄していた水を焚火にかけて湯を沸かし、体を温める。隣近所からの声がしたので、協力して、以前集落の防災活動で行ったとおり、集落内の安否確認を行う。内、自宅での転倒で負傷した人が見つかり、手当てをする。夜は、集落内の見張りを交代で続けた。また、山水を利用している人の自宅で、水を分けてもらう。</p>	<p>2日目、集落で声掛けし、飲食料や市販薬の相互支援（共有）を行う。県道は依然閉塞で孤立、携帯は今日は圏外表示になる。県道の閉塞は、大雨でもこれまで度々起きており、その都度皆で助け合うことが習慣化していたため、不安は少なかった。</p> <p>集落の集会所に保存されていた非常食と水が配られる。裏山の斜面の様子を見に行き、崩落の兆候があることがわかったため、ビニールハウスから出て、近隣の家に移動した。夜は冷え込み、湯たんぽ代わりにペットボトルに湯を入れて布で巻き、足元を温めた。集会所では、在庫を一覧にして、時々在庫の数字を更新した。裏山の見回りは二人一組で、時々行った。</p> <p>携帯で役場と連絡が取れ、集落内の安否を伝えた。携帯の充電は、集落内のある家にあつた手回し充電器を、順番に借りて充電した。</p>	<p>4日目、役場と集落をつなぐ県道斜面の応急対策が終わり、避難所に行けるようになる。役場からの連絡で避難所が開いたと知らされ、集落の代表が先に様子を見に行く。斜面は、土のうと水抜きで引き続き安定を図っているが根本的な対策が必要。</p> <p>集落の代表から、各自が農機具や倉庫など、農業関係の被害を写真と共に記録しておくように言われた。</p> <p>3食は、共同炊事で、備蓄品で温かい汁物を作り、体を温める。</p> <p>自宅は、倒壊していないが、ライフライン（電気・水）が復旧していない中、高齢の母の健康を考えて、家族で避難所に移動する。</p>	<p>半月後、県道が仮復旧し、役場に行けるようになったため、罹災証明と支援相談を進める。家の片付けを始め、割れた瓶の掃除と床の消毒をし、畑は水路の詰まりを直した。</p> <p>停電も解消し、水も出るようになったため、避難所から自宅に戻る。</p> <p>苗の再手配を仲間と分担。倉庫の棚を固定し直し、落下防止の金具を追加。集落掲示板に作業計画と安全確認のチェック表を貼った。集落内の状況・健康確認、情報交換を兼ねて、朝のラジオ体操を習慣化し、困っている人がいないかを確認しながら、徐々に日常に戻るように努める。</p>	<p>1ヶ月以降、農業を徐々に再開。収穫計画を見直し、出荷は共同便でまとめて運ぶ。水路の土砂を定期的に掻き出し、斜面の監視を続ける。</p> <p>納屋にカセットガスで動く小型の発電機と工具の置き場を整え、次の災害に備えるようにした。</p> <p>家族で避難経路の再確認。販売先へ被害と再開予定の連絡を徹底し、品質管理表を新しく作る。季節の変わり目に向け、種と肥料の補充を進め、作業の安全基準を文書化した。</p> <p>役場のすすめで斜面の安全対策として雨量計が配られた。斜面監視は雨量計のしきい値を設定し、閾値超過で作業中止にするようにした。特に危険度の高い、住宅に接する斜面は、今後斜面の変動を監視する装置が設置される予定。</p>
			もし対策をしなければ	<ul style="list-style-type: none"> ●もし集落内で声掛けと安否確認の訓練をしていなかったら 負傷者の見落としや孤立死の危険が高まった ●もし閉塞の危険が少ない道を知らなかったら 二次災害に巻き込まれていたかもしれない 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし備蓄の共同管理や体温保持を怠ったら 低体温・脱水で行動できなくなった ●もし危険斜面への認識が不足していたら 転落・土砂災害の危険が増えた 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし役場と各集落の緊急連絡手段が無かったら 情報の入手や対応が遅れた ●もし農機・倉庫被害の記録を取らなかったら 補助申請や保険が認められず再開が遅れた 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし通行再開後に罹災証明と支援相談を進めなかったら 資材手当ができず収穫機会を逃した ●もし共助の仕組みがなかったら 集落住民の健康確保や仕事の再開に影響を及ぼした

3-3 シナリオ内容 ⑤公務員【内陸部（県道が閉塞し孤立）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
内陸部 (中山間地域) (県道が閉塞し孤立)	⑤公務員	自宅(休日)	<p>日曜日の朝、自宅でまだ寝ている際に強い揺れがある妻と生後6か月の乳児を起こして、寝室の隣にあるダイニングテーブルの下に一緒に入る。築10年くらいのアパートなので、持ちこたえる。揺れは長く、南海トラフ地震の発生を直感する。海沿いの地域は大丈夫だろうか。</p> <p>揺れが収まった後、スマホを見るが、停電で自宅のwifiも停止。キャリアの電波は不安定ながら届いているが、ネットニュースや天気予報アプリが読み込めない。充電が無くなると困るので、ラジオを付けるが、何年も使っていないため、電池が切れている。妻が車でラジオを聞いて！と叫ぶので、そうすると、高知県全体で、震度6強、ところによって震度7も出ていて、アナウンサーが津波からの避難を大声で呼びかけている。家の倒壊は免れたが、棚の書類が散乱。</p> <p>家族の安全を確保し、お隣の人にもしもの時の支援をお願いして、役場の初動対応マニュアルに沿って出勤。道路は一部寸断で迂回、庁舎では災害対策本部が立ち上がる。初動は各課が持ち場へ。避難所開設、物資の受入、情報整理、要支援者リストの更新。夜まで詰め、仮眠スペースを廊下で作る。情報班・物資班・避難所班の三班に分け、連絡はホワイトボードに時刻で記録。仮眠場所には耳栓とアイマスクが配布された。</p>	<p>2日目、能登半島地震での疲弊を教訓に、BCPに基づいて、二交代での24時間体制を徹底するように町長から指示が出る。県道閉塞で現場への移動に時間がかかり、無線で連絡を各課に回す。徐々に届く支援物資は、選別に時間がかかり、車両も不足して、町内の輸送の体制が整わない。</p> <p>避難所の混雑緩和策としてスペース区分、衛生動線、掲示板の整備。広報は定時のラジオ告知とSNSの同報で二重化。個人の疲労管理を徹底し、食事・休息の強制時間を設定。</p> <p>3日目の朝になって、いったん帰宅し、家族の顔を久しぶりに見て、自宅で寝る。</p>	<p>4日目、三交代へ移行。勤務時間は減ったが、24時間体制は続いているため、夕方や真夜中からという、平常時にはない勤務が続く。停電が続いており、役場の非常用発電機の燃料を補給して切らさないようにするために、協定先の業者で最優先での供給を依頼。</p> <p>また生活ごみ以外の災害廃棄物の処理対応が本格化する。罹災証明の仮受付を開始し、写真・位置情報の確認体制を整える。支援金の案内パンフを作り、窓口の混乱を減らす工夫。現場からの要望は一覧化してBCPの非常時優先業務の優先度を見直し、資源を再配分。夜の勤務のため、庁舎で短時間横になり、翌朝の調整会議に引き継げるように備えた。</p> <p>停電が1週間後によりやく解消し、役場での仕事や家庭生活の利便性が飛躍的に改善した。</p>	<p>3週間後、交代勤務を終了し、通常の勤務体制に近づく。避難所統合と福祉避難所の運用改善、申請窓口の増設が進んだ。</p> <p>道路の仮復旧に合わせ、生活再建に関する相談会を開催。地域のボランティア調整と、民間との協定活用で、救援物資の配送を安定化した。内部では被災経験の記録作成も着手。</p> <p>昨年度までに作成していた、事前復興計画に基づいて、対応する。仮設住宅用地として、町内の道の駅の駐車場、陸上競技場を検討。</p>	<p>1ヶ月以降、復旧段階へ。住宅再建支援、仮設住宅の入居調整。インフラ復旧の進捗管理を可視化し、週次で公表。住民説明会を定期開催し、復興に関する課題の掘り起こしと改善を迅速化する。</p> <p>災害対応の記録を整理し、次年度に向け、災害対応の課題を抽出。マニュアル改訂と訓練計画に反映する。</p> <p>BCP記載の非常時優先業務中心の対応から、BCPに記載されていない通常業務を徐々に増やし、平常時の対応に向かう。</p> <p>職員の疲労回復を図るため、休暇の分散取得とメンタルケアを推進。</p> <p>家族と過ごす時間も何とか取れるようになった。</p>
			もし対策をしなければ	<p>●もし自宅が旧耐震だったら 家族が負傷し、出勤自体ができなかったかもしれない</p> <p>●もし初動対応マニュアルを読んだことがなく、災害時の参集基準も理解していなかったら 参集が遅れて、町民の命を守る初動の役割が果たせなかった。</p>	<p>●もし交代勤務を取り入れなかったら 過労で判断力が低下し、事故やミスが起きた</p>	<p>●もしBCP記載の非常時優先業務を無視して、感覚的に目の前の要望に対応していたら 最も重要なことに人手が割けず、時間がいくらあっても足りない状況になってしまうかもしれない</p>	<p>●もし事前復興計画を作成していなかったら 災害後の復興のイメージが庁内・また住民との間で共有されていないため、合意形成から始めることになり、復興により時間がかかった</p>

3-3 シナリオ内容 ⑤公務員【内陸部（県道が閉塞し孤立）】

		～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	直後の緊急対応			初期の復旧段階	
		命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場	
内陸部 (中山間地域) (県道が閉塞し孤立)	⑥建設業 会社	<p>昼過ぎ、強烈な揺れが突然襲う。会社事務所内で机の下に身を隠し、揺れが収まるまで耐える。社内は書類が散乱し、棚が倒れるが、耐震補強済みの建物は倒壊せず。社員全員の安否確認をBCP記載の行動マニュアルに従い実施。携帯電話は繋がりにくいが、社内無線で連絡を取り合う。停電と断水になり、家族の安否が気になる。1時間ほどして会社から、周辺の状況と今後の対応について説明を受ける。高知市方面とつながる県道は土砂災害で、閉塞しているという。帰宅が困難になることを想定し、社内備蓄の水と食料を確保。夕方、家族と連絡が取れ、自宅の建物は無事と確認し安堵する。自治体からの初動情報は遅れがちで、ラジオで各地の被害状況を把握。余震を想定し、社員同士で夜間の安全確保を話し合い、簡易寝具で仮眠を取る。</p>	<p>翌日、余震が続く中、県からの要請で、主要県道の斜面崩壊による閉塞箇所3か所の緊急除去作業を開始する。BCPに基づき、同業者の協力も得て、重機と燃料を最大限確保し、社員の班編成をして現場へ向かう。道路啓開は地域の物流と救援物資輸送に直結するため、昼夜を問わず（交代制で）作業を進める。昼頃に、携帯の電波が一時的につながったので、LINEを使い、家族宛てに「避難所に行けるのか、当面の食べ物はあるか等」を伝えた。社内ではポータブル発電機を稼働し、通信と照明を維持。社員の疲労を考慮し、引き続き交代制を徹底する。現場では自治体職員と連携し、閉塞区間が通行見込みを地元住民に伝達。地域からの差し入れが士気を高めるが、作業に必要な燃料不足の不安は続く。</p>	<p>4日目以降も、閉塞箇所が複数あり、道路啓開作業は続くが、燃料不足や資材調達に対応に時間がかかる。幸い、BCPの作成時に契約した燃料供給業者との連携が功を奏し、必要量を確保できる。少しずつ通行可能箇所ができ、地域住民からの感謝の声が現場に届く。一方、停電と断水が長引き、家族は避難所での生活を続けるが、疲労が増す。会社では、社員の健康管理を重視し、1週間に1日は必ず休むことを徹底する。過去の地震の教訓を踏まえ、重機の故障に備えた予備部品の確保が役立つ。自治体と予め計画していた、優先復旧路線の選定が功を奏し、順序立てた道路啓開ができ、自助・共助・公助を生かした地域防災の重要性を再認識する。</p>	<p>地震から2週間を経て、幹線道路の啓開はほぼ完了し、地域の交通が回復する。会社は次の段階として、被災した公共施設や生活道路の応急復旧に着手する。社員は通常業務に戻りつつ、復旧工事に従事。家族は電気・水道の復旧により、避難所から自宅に戻る。会社では、今回の緊急対応を振り返り、今後のために、改善点を洗い出した。県と地元建設業者の調整の会議に参加し、建設業者としての役割を確認。それを踏まえて、会社では、長期的な復旧に備えた人員計画を作成する。</p>	<p>仮設住宅の整備も本格化する一方で、公共工事以外に、地元企業や地元住民の建物の修理依頼が増える。ただし、人材と資材など、リソースの確保が追いつかず、十分な対応ができない。一方で会社は、災害対応で得た経験を活かし、BCPを改訂。社員教育を強化し、次の災害に備える。地域では、斜面崩壊対策や避難路整備の計画が進む。家族は徐々に平常時の生活に戻り、備蓄品を再補充する。集落内では、県内・県外へ避難し、まだ戻れない人も多い。自治体では、事前復興計画に基づき、転出者が戻るように、住宅の清掃や再建の支援を行っている。</p>
		もし対策をしなければ	<p>●もしBCPに基づく安否確認が無かったら ⇒社員の所在不明で救助が遅れた</p> <p>●もし社内備蓄と簡易寝具を準備しなかったら ⇒帰宅困難時の安全と健康確保が問題になった。</p>	<p>●もし重機や燃料確保の事前の調整が無かったら ⇒道路啓開が遅れ、救援物資輸送が滞った</p> <p>●もし自治体との情報共有を怠ったら ⇒通行可能区間の周知が遅れ、住民の不安が増大した</p>	<p>●もし予備部品の準備していなかったら ⇒重機故障で作業が中断した</p> <p>●もし優先復旧路線の調整をしなかったら ⇒復旧の順序が混乱し、物流が停滞した</p>	<p>●もしBCPの改善点を検証しなかったら ⇒次回災害で同じ問題が再発した</p> <p>●もし行政との調整会議に参加しなかったら ⇒連携不足で復旧が遅れた</p>

3-3 シナリオ内容 ⑥高齢者（独居）【内陸部（県道が閉塞し孤立）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
内陸部（中山間地域） （県道が閉塞し孤立）	⑦高齢者（独居）	自宅	<p>強い横揺れを感じた。自宅が昭和30年代に建てた古い家屋（旧耐震）のため、倒壊を恐れて外へ飛び出したが、落下してきた瓦で負傷する。揺れが収まった後、自宅は半壊状態。額の切り傷、血を押さえながら隣人に助けを求める。独居高齢者であることを良く知る隣人は、すぐに車を出してくれた。車で医療救護所へ搬送される途中、道路が各地で寸断され、県道も斜面崩壊で通行止めになるのを見る。何とか医療救護所に到着し、医師が県道の閉塞で駆けつけることができず、看護師から応急手当を受ける。止血後、毛布で体を包み、冷え防止に新聞紙を足に巻く。薬袋とメガネを首から提げ、紛失防止を図る。その後、隣人の助けで、隣接する避難所に向かう。県内にいる息子に電話をしたがつかない。不安なまま夜を迎えた頃、息子から電話があり、状況を伝える。</p>	<p>避難所へ移動する際は混雑回避のため時間帯をずらし、受付で名簿に自分の情報を記載する。自分の場所は出入口近くに確保し、トイレまでの距離を短縮。インフルエンザの感染対策で避難所内の密度を下げるために、間隔を広げる。食事は柔らかめを選び、体調記録をスタッフと共有。夜は冷え込み、カイロを腰に貼り、毛布を肩と膝に掛ける。寝泊まりが不安なので、医療救護所に連れて行ってくれた隣人が引き続き付き添ってくれた。隣人は、福祉避難所が開設されたら、優先的に移動できるように掛け合ってくれた。水分は少量頻回で、脱水防止に塩分補給を小さじで対応した。さらに、服薬時間を紙札に書き、ボランティアに見える位置に置いて誤薬を防ぐことにした。</p>	<p>福祉避難所開設の知らせを受け、体調評価後に移動。静かな部屋で睡眠が取れ、血圧も安定。罹災証明は家族に依頼し、写真と書類を準備。撮影は玄関・居間・台所の三点を基本に記録。医師の巡回で傷の経過を確認し、消毒と絆創膏交換を続ける。薬は曜日別ケースに仕分け、服用時間を札で明示。今後の長期的な対応を考えて、福祉避難所から仮設住宅に行くよりも、町外の家族のもとにいったん行く方が良くと考え始める。</p>	<p>県道仮復旧で息子と合流し、生活の場を移す計画を立てる。半壊した家の片付けは社会福祉協議会を通じてボランティアに依頼し、危険箇所をテープで封鎖。自宅を修理して再度住むか検討を始める。福祉避難所から息子宅に移動し、引き続きケガの治療を受ける。</p>	<p>息子宅での生活に慣れ、通院と手続きが安定。結局、住み慣れた故郷や自宅を放置する気になれず、自宅修理の見積を取り、修理をして故郷に戻る方向で計画を進めることにした。計画するために役場の相談窓口で金銭的な支援を受けられることも知った。再建計画には資金繰りと工期調整を含め、次の災害に備えた耐震補強も検討する。</p> <p>息子宅では、散歩と体操で体力維持を図り、ADL低下を防ぐ。災害時の合図（ライト・ホイッスル）を息子宅の玄関に掲示。</p>
			もし対策をしなければ	<p>●もし自宅の耐震性をよく理解していなかったら 揺れの際中に自宅内に留まり、半壊する中で重傷を負っていた可能性がある</p> <p>●もし隣人が災害時に助けることや医療救護所に行くことを知らなかったら 手当が遅れて、重篤な状態になっていた可能性もある</p>	<p>●もしインフルエンザの対策（密を避けること）をしなかったら クラスターの発生につながる可能性がある</p>	<p>●もし福祉避難所へ移動しなかったら 静養が取れず傷の治癒が遅れた</p> <p>●もし罹災証明の重要性を知らず、後回しにしていたら 公的支援が遅れ生活再建が困難になった</p>	<p>●もし自宅の片づけを社会福祉協議会を通じてボランティアにお願いできなかったら 安心して息子宅に一時避難できなかった</p>

3-3 シナリオ内容 ⑦会社員【高知市周辺（長期浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
高知市周辺 (長期浸水地域)	⑧会社員	オフィス	<p>大きな揺れの中、ビル1Fにあるオフィスのキャビネットは固定が効き、転倒はしなかった。いったんデスクの下に潜って頭を守る。全館の緊急放送で、大津波警報が発せられたことを知り、上層階へ垂直避難する。市内の低層の店や事務所は大丈夫だろうか……</p> <p>エレベーターは停止しているため、非常階段で移動する。</p> <p>1時間も経たないうちに、ビルの回りでは膝下の浸水が始まり、周辺道路は通行不能。家族とは連絡がつかず、社内の安否確認で自分の状況を共有した。</p> <p>ラジオから、高知県内の沿岸部が大きく浸水し、山間部でも道路が寸断されているとの情報。ビルの外は市内の中心部全体が水に浸かっているという信じられない光景が広がる。家族とは、地震発生後3時間してようやくSNSで互いの無事を確認したが、自宅の2階にいて、1Fが浸水し、身動きが取れないと聞く。社内では非常食を配り、夜は会議室で仮眠。安否確認は部署横断の表で共有し、体調不良者を会議室へ誘導。非常食は水分の多い物から配布し脱水を防止。</p>	<p>2日目、周辺の排水が進まず帰宅困難。ビルに備蓄された飲料と毛布を配分する。震度5くらい余震があり、社員の一人が階段室で転倒し、ショックで心臓が停止、こちらの呼びかけに答えない状況となったため、半年前に消防署から指導を受けたことを思い出し、心臓マッサージを実施。依然、心拍の回復が見られないため、AEDを取り出し、音声ガイドに従ってショックを与え、蘇生を試みる。幸い、心臓の鼓動が出て、意識が回復したが、病院への移送が必要と判断し、119番通報した。しかし、救急隊もボートでしかアクセスできず、搬送も順番待ちで3時間はかかるとの答えがあり、それまで社内で行える救命対応を電話で聞いた。</p> <p>通信が不安定な中、家族からボートで救出されたとの連絡が入り、浸水エリア外の避難所に避難したことを確認。今後、朝昼夕の3回、SNSで状況を交換することとした。</p>	<p>ビル内での待機も長期化し、かなり疲れてきたため、そろそろ帰宅できないか市役所に問い合わせたが、浸水したエリアは地盤沈下で、湖のように水が溜まっている状態にあるため、すぐには市内を移動できるようなにはならない、あと最低2週間はかかると言われた。もし負傷したり、病気になる等の場合は、ボートで救助に行くとのこと。</p> <p>高齢の両親は一時避難した避難所から福祉避難所へ移動した。大変なことの1つは停電がなかなか解消しないこと。このため、昼間はともかく、夜間は備蓄品のランタンなどを大切につかって最低限の明かりを確保した。</p> <p>このビルの備蓄は、通常よりも多く、1週間分はあったが、それ以降は、屋上にヘリコプターから届く救援物資でしのいだ。トイレが使えなくなった時に備えて、使い捨てトイレも1週間分はあったが、汚物を薬剤で処理してビニール袋で封印しても、臭いが漏れるが、空調ファンも停止しているため、大変だった。</p>	<p>地震発生から半月が経過し、停電が解消してから数日して、ようやくこのエリアの排水が進み、ビルを出ることができるようになった。</p> <p>水は引いているものの、街じゅうに瓦礫やごみが散乱し、地震前とは様変わりしている。</p> <p>自宅はすでに1Fが浸水し、すぐには使えないと連絡を受けていたので、家族がいる避難所に向かった。会社のオフィス自体が浸水してしまったため、いつから業務を再開できるかわからない状況だが、会社からの情報では、BCP作成時に検討していた、浸水していないエリアで、仮の事務所をすぐに検討したので、他社よりも動きが早く、契約することができたとのこと。</p>	<p>1ヶ月を過ぎ、ビルの清掃や設備の復旧をしている間、郊外の小さなビルに間借りし、取引先とのやりとりや、データの確認を行った。</p> <p>幸い、データはデータセンターにバックアップを取っていたので、比較的スムーズに業務を再開することができた。</p> <p>あまりにもビルでの避難生活が長かったため、疲労と精神の落ち込みがあり、専門家からメンタルケア（カウンセリング）を受ける事になった。</p> <p>現在、自宅の罹災証明の申請をしながら、浸水部分の清掃と構造的に問題が出ていないか確認を進めている。</p> <p>あと2週間くらいすれば、借り上げの仮設住宅に住むことができそうだという話を聞いている。</p>
			もし対策をしなければ	<ul style="list-style-type: none"> ●もし上層階への垂直避難をしなかったら 浸水や漂流物で生命の危険があった ●もしオフィスに飲料・食料の備蓄がなかったら 市内が長い時間浸水しているため、社員が脱水症状や空腹で体調を崩していた 	<ul style="list-style-type: none"> ●もしAEDの使い方を知らなかったら 心肺が停止していたかもしれない 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし備蓄が1週間ではなく3日分くらいしかなかったら 行政から食糧の支援が間に合わなかったかもしれない。 ●もし食糧以外の備蓄品（特に使い捨てトイレやランタンなどの照明）がなかったら トイレに汚物がそのまま溜り、見るに堪えない不衛生な状態になったり、日没後の行動ができない 	<ul style="list-style-type: none"> ●BCPで代替オフィスの場所に目星を付けていなかったら 代替オフィスの確保が遅れ、事業再開にもっと時間がかった。

3-3 シナリオ内容 ⑧商店【高知市周辺（長期浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
高知市周辺 (長期浸水地域)	⑨商店	中心商店街	<p>2分以上つづいた長い揺れの後、商品が棚から落ちるが建物は倒壊せずに済んだ。過去の訓練どおりに、商店街を歩いていた来街者に声掛けし、アーケードを抜けて、最寄りの津波避難ビル（オーテピア）へ誘導。地震発生後、津波が60分程度で中心部に押し寄せることを、商店街の勉強会で聞いていたので、対応を急いだ。店では、津波来襲に備えて、貴重品は、店舗の3F以上に保管してある。オーテピアでは、避難ルートの掲示に沿って上層階に向かった。名簿に名前を記載し、夜はビル内で待機し、毛布と水を分け合う。</p>	<p>2日目、周辺の排水が進まずビルで継続待機。持ち出しバッグの貴重品と持参した少量の飲食物が必要最低限をまかなう。館内の説明では、オーテピアは、津波避難ビルだが、長期の避難所には指定されていないため、最低限の備蓄はあるが、今後ポートなどで避難所に移動する必要があるという。商店街の役員が数名いたため、相談し、市と協力して、掲示板を作り、救援・避難所開設・物資配布等の情報を共有することにした。今回の津波は、高知県が想定した最大規模に近いと、排水に2週間以上かかる可能性がある、市から情報が入った。このため、体調の悪い数名の方を優先的に、病院等へ移送するように、市に要望した。</p>	<p>4日目になり、排水が進まないため、ビル内の一時避難者がポートで、市内北部の（浸水していない）避難所に移ることになった。自分の店舗や商店街は、すでに1F部分が浸水しており、営業も居住も不能。このため、避難所へ移動し、今後の対応を検討することとした。罹災証明の準備と在庫の被害確認を進めたいが、水が引いていないため、不可能な状況で肩を落とす。夫婦で避難所に移動し、取引先（主な顧客に）連絡しながら、仮設住宅申請と、仮設店舗の候補場所の情報収集を開始した。</p>	<p>約4週間後、仮設住宅へ入居。商店街振興組合で再建計画を協議。3年前に作成していた、津波浸水時の復興計画を始動。中心部の排水の完了に合わせて、商店街全体の清掃、瓦礫やごみの処分、アーケードの補修、各店舗の再建を進めることになった。商店街に対し、商工会議所が公的な支援の窓口になり、組合として支援を受けることになった。しかしながら、個店の修繕も含めて、商店街の再開までには2年～3年かかるため、復興計画時に想定していた場所で、希望者が仮設店舗での営業を始めることになった。</p>	<p>3ヶ月以降、仮設店舗で営業再開。仕入と在庫管理を見直し、現金管理の安全策を強化。アーケードと店舗の本再建に向け、商工会議所の支援を受けながら、設計と資金計画を詰める。イベントを小規模で再開し、地域の回遊性を高める工夫を続けることになった。</p>
			<p>もし津波避難ビルを知らなかったら 津波に飲み込まれていた可能性がある。</p> <p>●来街者の避難誘導の訓練をしていなかったら 避難できる猶予時間や、避難にかかる時間もわからず、逃げ遅れによる負傷・死亡の危険が増した</p> <p>●業務関係と個人の貴重品を1Fに置いていたら 津波発生時に上部階に運ぶことになり、逃げ遅れた可能性がある。</p>	<p>●もし「津波避難ビル」と「指定避難所」の役割の違いがよくわかっていなかったら 津波避難ビルにしばらく住むことができると誤解していたかもしれない</p>	<p>●商店街が浸水したらその後のようなステップで自分の居住地が変わるかかわかっていなかったら 時間軸に沿って自分の状況のイメージが持てず、想定外のことがばかりになり、生活や仕事の再建にさらに時間がかかった。</p>	<p>●もし商店街で再建計画を協議していなかったら やるべきことの整理に時間がかかり、さらに再開が遅れた</p>	<p>●もしもの時に仮設店舗で復旧することを想定し、シミュレーションしていなかったら 仮設店舗営業に踏み切るのにとっても時間がかかり、チャンスを逃していたかもしれない。</p>

3-3 シナリオ内容 ⑨高齢者（独居）【高知市周辺（長期浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
高知市周辺 （長期浸水地域）	⑩高齢者（独居）	自宅	<p>強い揺れが3分ほど続いたのだろうか。建物は2年前に、柱の耐震補強はしていたので、外に飛び出ることなく、室内のテーブルの下で揺れの収まるのを待った。</p> <p>高知県の被害想定を新聞で見ていたので、1時間くらいで自宅の1F部分は浸水してしまうことは知っていた。このため、大津波警報のアラート音を聞き、二階へ垂直避難。毛布を肩に掛け、冷たい空気に震えながら窓から外を確認。水が1階の半分の高さくらいまできており、徐々に室内に入り込んできた。近隣の呼び声に応え、連絡を取り合い、早く救助にきてほしいことを伝えた。持ち出しバッグを手元に置き、夜は毛布と湯たんぽで体を温める。二階への移動では手ずりにタオルを巻き、滑りを防いだ。毛布は肩と膝を覆い、足先に新聞紙を重ねて保温。</p>	<p>2日目、救助ボートが到着するまでは時間がかかり、いつ来るのかもわからなくて不安を感じた。このため、個別避難計画作成した際に、避難の支援者になった町内会の人と連絡を取ったところ、今救助を要請しているので、もう少し待ってほしい、必要な物資があれば届けると言われた。（町内会では、2年前にゴムボートを購入し、学校のプールで救助の訓練をしたことがあった）救助に備え、荷物は最低限にまとめ、薬と連絡先メモを胸ポケットに入れる。救助ボートへの乗船前に持ち物を透明袋へまとめ、薬は首掛けポーチに。</p> <p>3日目の朝にようやく市の消防のボートが近づいてきたので、窓からの合図で位置を知らせ、2階のベランダから、助けを借りてゆっくりボートに移った。</p> <p>一時滞在場所に着くと体温を測り、温かい飲み物を受け取る。</p>	<p>4日目、福祉避難所が開設されたので、そこに移動する。静かな部屋で休息がやっと取れた。最近の体調記録を看護師と共有し、眠りが戻ってくる。自宅は一階が使えず、町内会の避難支援者の人をお願いして、罹災証明のための写真と書類を準備した。</p> <p>また、県外に住む息子と連絡がやっと取れ、道路、鉄道、空路の何れかが使用可能となり次第、福祉避難所に来てもらうことになった。</p>	<p>3週間目に入り、駆け付けた息子の助けを得て、仮設住宅へ優先入居するための申請を行った。</p> <p>仮設住宅に行けることは有難いが、自宅が浸水して、まだ片付けも済んでいないこと、仮設住宅が、自宅から徒歩では行けない遠い場所になることで、もしかしたら知らない人ばかりではないかと心配になった。</p>	<p>地震から1ヶ月が過ぎて、仮設住宅に引っ越す。同じ町内会の人は何人かいたのでほっとする。福祉避難所は安心だったが、久しぶりに共同生活が終わり、プライバシーのある生活になって、体調も整う。近隣と挨拶を交わし、見守りの連絡網に参加。非常時の合図や避難先をメモにして玄関に貼る。家の補修計画は季節と工事の空き状況を見て調整することになった。</p>
			<p>もし津波による浸水の高さを知らず自宅2Fへの垂直避難をしなかったら 浸水で生命の危険があった</p> <p>もし毛布や保温を用意しなかったら 低体温で体調を崩した</p>	<p>もし個別避難計画を作成していなかったら 支援者とのつながりがなく救助の要請が遅れていた。</p> <p>もし緊急避難時に備えて必要物を携行できるようにまとめていなかったら 服薬・連絡ができず不安が増した。</p>	<p>もし罹災証明の申請準備をしなかったら 仮設入居の優先が下がり住まい確保が遅れた</p> <p>もし健康記録を共有しなかったら 福祉避難所での対応が滞った</p>	<p>もし仮設住宅の優先入居手続きをしなかったら 長い期間避難所にいるか、県外の息子のところに行く可能性があった。</p>	<p>もし仮設住宅のコミュニティに参加しなかったら 孤立が深まり緊急時に助けが得られなかった</p>

3-3 シナリオ内容 ⑩国内観光客【観光客（津波浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
観光客 (津波浸水地域)	⑪国内観光客	はりまや橋	<p>観光中、路面が揺れて橋の周辺で転びそうになる。地元の店員に声を掛けられ、最寄りの津波避難ビルへ誘導される。階段を上りながら同行の友人と安否を確認し、上階で待機。水と毛布が配られ、スマホの電源を節約するために、写真や動画の投稿は控え、電池温存を優先。使用は最低限にする。夜は不安だが、見知らぬ人同士で励み合った。</p> <p>夜になって奇跡的にSNSで家族と連絡が取れて、避難している場所と、浸水が長引く可能性があるため、すぐには東京に帰れないことを伝えた。</p>	<p>2日目、市内の排水が進まずビルで継続待機。荷物の紛失防止にタグをつけ、貴重品は体に密着。緊張が続くため、深呼吸と軽いストレッチで体調を整える。</p> <p>待機場所のゾーン分けで混雑を回避し、列での立ちっぱなしを避けた</p>	<p>4日目、排水が進まない。周りの人の話では、地盤が低いので水が自然に流れていかないらしい。徒歩で外に出るには2週間以上かかる可能性もあるとのこと。</p> <p>しかし、遠方からの来訪者（地元出身のいないビジネスマンや観光客等）、また体調を崩して入院が必要な人に対して、今後の受入情報が掲示され、ホテルや避難所の候補が示される。</p> <p>ボートによる避難所やホテルへの移動を申し込むが希望者が多いため、1日、2日はかかるかもしれない。</p> <p>ようやくボートでの宿泊施設や避難所への移動が可能になり、ボートに乗り込む。市内は、まだ水没状態で、衛生状態が懸念される。</p> <p>浸水していないエリアのホテルに到着し、身体を水拭きして着替えると、急に眠りに落ちた。</p> <p>帰宅の交通は未復旧のため、代替ルートを集めて待機。</p>	<p>市内の安全情報を確認し、記憶の整理のため写真とメモをまとめる</p> <p>3週間目に入った頃、陸路・鉄道・空路が段階的に復旧。乗車・搭乗の整理が始まり、順番に案内される。高知空港の復旧に時間がかかるため、バスで高松に向かい、そこから空路で東京に向かった。</p> <p>高知市からの案内もあり、今後に備えて、宿泊費や必要経費の記録を残し、保険の手続きに備える。</p> <p>宿泊費は領収書を一枚にまとめ、帰宅後の申請に備えた。</p>	<p>帰宅後、急激なストレス経験に伴う心身の変化に注意し、健康診断を受けるために病院を受診した。</p> <p>高知市や一時滞在したホテルへ支援への感謝を手紙で伝える。</p>
			もし対策をしなれば	<ul style="list-style-type: none"> ●もし地元の誘導に従わず避難ビルへ移動しなかったら津波に巻き込まれる危険があった ●スマホの電源使用を節約しなかったらすぐに充電を消費し、家族との連絡が取れなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし荷物管理をしなかったら貴重品紛失で帰宅や身分確認が遅れた 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし遠方からの来訪者が優先的にホテルや避難所に誘導されなかったら慣れない、見ず知らずの人ばかりのところで心身ともに不調を来していた可能性はある。 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし交通情報や避難生活時の記録を残すことなど、災害時帰宅困難者向けの案内がなされなかったら帰宅が遅れ、保険手続きなどの情報が手元に残らなかった。

3-3 シナリオ内容 ⑪クルーズ船乗客【観光客（津波浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
観光客 (津波浸水地域)	⑫クルーズ船乗客 (外国人)	高知新港客船ターミナル	<p>埠頭で揺れが始まり、「TSUNAMI!」「GO UP!」「RUN!」というスタッフの大声やジェスチャーに従って港内の高台へ移動。足元は滑りやすく、同行者と手を取り合う。高台から海面の不気味な変化を見て、静かに待機。スタッフの「We are safe. Don't panic.」という説明に安心する。船会社の連絡が入り、船は港外へ避難すると知らされる。高台上の建物に一時的に避難して、水と毛布を受け取り、夜は座って休む。高台での待機中は毛布をまとめて、体温低下を防いだ。また一部市内に行った外国人乗客の安否が心配になった。</p>	<p>2日目、高台で待機継続。安否確認と言語サポートが用意され、必要な人に手伝いが入る。船の状況が定期的にアナウンスされ、帰還の可否が検討される。体調管理のため軽い体操を行い、日差しを避けて休憩。安否確認は名簿番号で行い、個人情報をも最小限に。日差し避けのためシートで簡易日陰を作った。</p> <p>市内に観光に出かけた外国人グループは、事前に共有された災害時の緊急番号に電話が入り、高知城近くの津波避難ビルで保護され、全員の無事が確認された。市内では、近くの人々の声やジェスチャーと「TSUNAMI ESCAPE BUILDING」のサインに助けられた。津波避難ビルからは、ボートで優先的に救出され、フェリーターミナルに戻る事ができた。</p>	<p>4日目、船が港に戻り、乗客は順次船内へ移動。客室で休息が取り、食事や医療の提供が再開。災害時の対応マニュアルに基づいて、この先の寄港地の安全確認が行われ、次の航路計画が練られる。必要な手続きと案内が各言語で配布される。船内では食事アレルギーの申告を再確認し、医療室の連絡先を全客室に配布。</p> <p>次の寄港地の安全が確認され、乗客は再乗船。港の修復状況に応じて出航。</p>	<p>船内では、健康診断やカウンセリングが行われ、乗客は今後の観光計画の見直しを行った。</p>	<p>クルーズ船の運航会社では、今回の被災を教訓に、大地震や津波、台風時の危機管理計画を見直し、乗客が慣れない土地で危険に巻き込まれないよう、防災ハンドブックを多言語で作成した。</p>
			<p>もし対策をしなけば</p> <ul style="list-style-type: none"> ●もし港内の高台へ避難できず、移動しないまま岸壁周辺に留まったら津波や落下物で負傷する危険があった ●もし英語やジェスチャーの案内がなかったら状況がわからず、逃げ遅れたり、情報不足で不安になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし街中で英語のサポートがなかったら逃げ遅れの発生や、クルーズ船の状況や災害の情報が十分に伝わらず混乱した。 ●クルーズ船の乗客が市街地の津波避難ビルにいないことが市で共有されなかったら優先的に救助され、ターミナルに戻るのが遅れた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし災害時の対応マニュアルがなかったら確認漏れ、説明漏れなどが発生し、乗客が混乱した。 	<ul style="list-style-type: none"> ●もし船内で、健康診断やカウンセリングが行われなかったら乗客の心身の不調が、突然顕在化した可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ●クルーズ船の運航会社が大地震や津波の危機管理計画をそもそも持っていなかったら津波後のスムーズな対応ができなかったかもしれない。

3-3 シナリオ内容 ⑫お遍路さん【観光客（津波浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
観光客 (津波浸水地域)	⑬お遍路さん	沿道部国道	<p>路上で強い揺れ。防災無線の音声（日本語と簡単な英語）や地元の人声掛けに従い、国道から外れて津波避難タワーへ。背負ったリュックを軽くし、水と食料を上に入れ直す。階段を上る途中、年配者に肩を貸して休憩を挟む。上階で座り、靴を緩めて足の血行を整える。海の異様な静けさの後、黒い波が押し寄せるのを遠くに見る。夜は読経で心を落ち着け、体温を逃さないよう上着を重ねる。数珠と納経帳を防水袋へ移し、歩行用の杖をタワー内でゴムキャップに交換。</p>	<p>2日目、タワーで待機。受け入れ先の案内が掲示され、宿の候補や避難所の情報が更新される。荷物の重量を見直し、必要最小限に再パッキング。水分補給と足のストレッチを続け、靴擦れの手当て。同行者がいないため、地元町内会のリーダーと連絡先を交換し、今後の行き先を伝える。荷物は雨具・水・食料・薬を上部に再配置。大阪に住む家族宛てにSNSで連絡を入れるが、なかなか既読にならない。</p>	<p>4日目、浸水の解消に伴い受け入れ先の旅館に移動。ただし停電は継続しており、洗濯と足のケアを行い、地図で安全な歩行ルートを確認。食事の配布時間や等営業情報をメモ。風呂に入れないため、水で体を拭く。歩行再開は無理をせず、朝夕の涼しい時間帯に限定。足の水ぶくれは針を使わず保護材で対応。1週間後に、高知市内に到着。県内が大規模に被災し、緊急事態になっているため、八十八か所巡りはいったん中断し、再開したばかりの高松行きのバスに乗り、高松から別のバスで大阪を目指す。高知駅を出て、20時間後に大阪の自宅に戻った。</p>	<p>道中で経験した被災時の経験、毎日の変化をメモし、写真とともに記録した。道中で得た支援に感謝のメールや手紙を送った。また、医療機関で健康診断を受けた。</p>	<p>1ヶ月以降、四国内の被災地情報を把握しながら、巡礼中に行方不明になった人のことを知り、現地できり合った方に、行方不明者のことを知らないか確認することにした。</p>
			<p>もし対策をしなかったら</p> <ul style="list-style-type: none"> ●もし地元住民の声掛けに従わず国道に留まったら津波で命が危険にさらされた ●もし防災無線（多言語）がなかったり、地元の人が外部の人に声掛けをしなかったら津波の危険に気づかず、命の危険にさらされた 	<p>もし地元町内会のリーダーに自分の情報を伝えていなかったら 行方不明者情報などが行政機関や警察に共有されなかった。</p>	<p>もし安全な歩行ルート確認と旅館の情報を確認しなかったら、 危険箇所です事故や体調不良に陥った</p>	<p>もしお世話になった人に連絡をしなかったら 現地では安否不明者として引き続き扱われていたかもしれない。</p>	<p>安否不明者について巡礼できり合った方々に照会しなかったら 安否の確認がさらに遅くなるかもしれない</p>

沿岸部



▲安芸市



▲黒潮町



▲四万十市



▲中土佐町

高知市内



▲五台山



▲タナスカ地区



▲海老ノ丸ポンプ場



▲江の口川排水機場

内陸部



▲馬路村



▲馬路村



▲高知市土佐山地区



▲高知市土佐山地区

観光客



▲高知新港



▲高知新港



▲高知新港

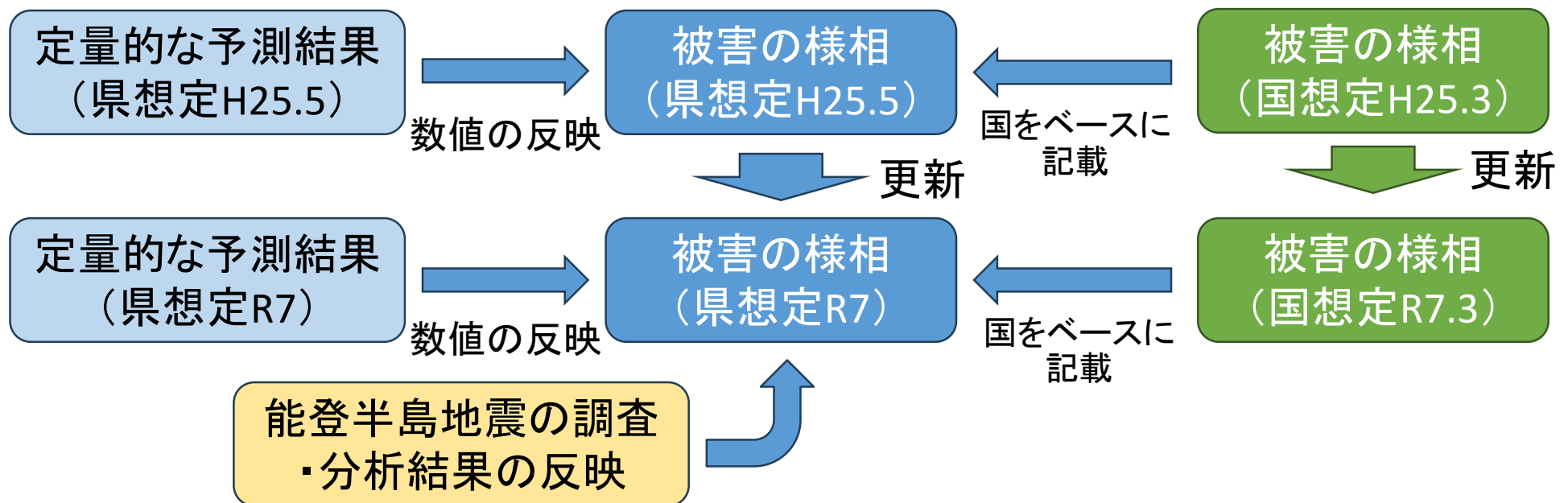
被害様相について

- 1 被害様相の更新方針**
- 2 県の被害様相（前回）と国の被害様相（最新）の比較**
- 3 建物被害の様相の記載イメージ**

1 被災様相の更新方針

現行の被害様相は国想定（平成25年3月）をベースに、県の予測結果の数量を反映するとともに、県内で起こり得る事象を反映していた。

今回作成する被害様相についても、国の被害様相（令和7年3月）をベースとするとともに、県の予測結果の数量の反映のほか、令和6年能登半島地震の調査・分析結果を踏まえて、県内で起こり得る事態についても充実を図る。



被害シナリオに盛り込んだ知見は様相にも入れ込むものとする。ただし、特定のシチュエーションにおけるシナリオとは異なり、様相は網羅的に起こり得る事象を取り上げることを意識する。

2 県の被害様相（前回）と国の被害様相（最新）の比較

国の被害様相（R7.3）の項目		県の被害様相（H25.5）からの追加項目例 （キーワードを抜粋）
建物被害、屋外転倒・落下	揺れ・液状化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 軟弱地盤地域での杭基礎被害 ・ 後発地震や余震による被害拡大
	津波	<ul style="list-style-type: none"> ・ 津波警報による消火活動支障 ・ 浸水した自動車や太陽光発電からの出火
	火災	<ul style="list-style-type: none"> ・ 感震ブレーカー設置による出火抑制
人的被害	直接死	<ul style="list-style-type: none"> ・ 火災旋風による死傷者の増大 ・ 津波火災による避難ビル等での死傷の発生
	災害関連死	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地震・津波に伴うショック・ストレス ・ 津波による低体温症 ・ 屋外での長時間避難に伴う熱中症・低体温症、疲労等 ・ 初期治療の遅延、日常的な治療の困難 ・ 避難所等の劣悪な生活環境による心身の健康被害 ・ 猛暑による熱中症や冬季の低体温症等による死亡 ・ 要配慮者を中心に、生活上必要な支援を受けられずに死亡 ・ 精神的ストレスに伴う疾患や自殺等 ・ 災害応急対策活動に伴う過労 ・ 生活環境の変化等に伴う死亡
ライフライン被害	上水道 下水道	<ul style="list-style-type: none"> ・ 耐震化未実施の管路・施設等の甚大被害 ・ 全国被害による復旧作業の遅れ
	電力 情報通信	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全国被害による復旧作業の遅れ
	都市ガス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対策の推進による低圧導管の供給停止範囲の極小化

2 県の被害様相（前回）と国の被害様相（最新）の比較

国の被害様相（R7.3）の項目		県の被害様相（H25.5）からの追加項目例 （キーワードを抜粋）
交通施設被害	道路	<ul style="list-style-type: none"> ・ 緊急輸送道路沿道の耐震性の低い建物倒壊による道路閉塞 ・ 高速道路での大規模な交通渋滞の発生 ・ 緊急の仮復旧と啓開によって内陸部の広域ネットワークが最優先で確保 ・ 航路啓開後、港湾を經由した道路啓開用資機材の搬入 ・ アクセスが海路・空路に限定（さらに厳しい様相）
	鉄道	<ul style="list-style-type: none"> ・ 技術者・専門的知見が不足する地域鉄道の自力復旧の困難
	港湾	<ul style="list-style-type: none"> ・ 津波火災による港湾利用再開遅延 ・ 地震・津波による港湾施設被害が要因の高潮被害の発生
	空港	<ul style="list-style-type: none"> ・ 強い揺れや津波を伴う余震による再度の閉鎖
生活への影響	避難者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 軟弱地盤上のマンション被害による避難者の増加 ・ 在宅避難者やペット同行避難者への対応不足 ・ 女性、妊婦、乳幼児の感染症等の発症 ・ 広域避難者の多数発生による行政の生活支援の困難化
	帰宅困難者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 膨大な帰宅困難者の発生、一時滞在施設の不足
	物資	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観光シーズン等の発災による平時以上の物資の不足
	医療機関	<ul style="list-style-type: none"> ・ 医療空白地域の発生、長期湛水地域の医療機関の孤立
	保健衛生・防疫等	<ul style="list-style-type: none"> ・ アレルギー対応の食事の不足、哺乳瓶の消毒不可等の影響
	各種生活サービス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 公共交通機関の運休、保育所・学校等の休業・休校、行政サービスの停止など

2 県の被害様相（前回）と国の被害様相（最新）の比較

国の被害様相（R7.3）の項目		県の被害様相（H25.5）からの追加項目例 （キーワードを抜粋）
災害廃棄物等		<ul style="list-style-type: none"> ・用地不足による避難所、仮設住宅用地と仮置場等の土地利用の調整
その他の被害	道路閉塞	<ul style="list-style-type: none"> ・沿道建物やブロック塀、電柱等の倒壊による復旧作業の遅れ
	要配慮者	<ul style="list-style-type: none"> ・生活環境の変化などからくる心身の負荷による災害関連死 ・外国人に対する支援不足 ・一般避難所での障害者・介護者のストレス増加 ・平時の介護サービスの中断による心身の健康上の影響 ・介護職員等の業務量過多による離職者の増加
	孤立集落	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢化が進む孤立集落では外部への支援要請伝達も困難
経済被害		<ul style="list-style-type: none"> ・自粛行動による商業・観光サービス業の売上低下 ・商店・企業の撤退・倒産、地域経済全体の地盤沈下

3 建物被害の様相の記載イメージ

地震発生直後	
液状化による被害	・液状化により、約1,100棟の建物が沈下・傾斜による全壊被害を受け、継続的な居住や日常生活が困難となる。
揺れによる被害	<ul style="list-style-type: none"> ・古い建物や耐震性の低い建物を中心に約15,000～80,000棟が全壊する。 －老朽化した耐震性の低い木造建物が倒壊する。 －ビルやマンションの倒壊や1階が駐車場である建物の圧壊が発生する。 －地盤が軟弱な(地震による揺れが増幅されやすい)地域等で、杭基礎を有する建物において、地震時に杭が損傷する可能性がある。 －半壊や一部損壊の被害が生じた建物は、後発地震や余震によって被害が拡大するおそれもある中で、居住継続・事業継続が困難となる。
津波による被害	<ul style="list-style-type: none"> ・津波によって、約17,000～66,000棟が全壊する。 ・高知市、宿毛市などの長期浸水エリアでは、被害状況の確認や復旧が長期化する。
急傾斜地崩壊による被害	・地震に伴う急傾斜地の崩壊により約170～710棟が全壊する。
地震火災による被害	<ul style="list-style-type: none"> ・木造密集市街地を中心に、建物の倒壊や漏電に伴う地震火災が同時多発的に発生し、約3,000～5,500棟焼失する。 －津波警報等が発表された地域では、津波避難のために住民による初期消火が困難となるおそれがあり、津波浸水を免れた場合でも火災被害が発生するおそれがある。 －津波警報等が発表された地域では、消防機関も一時的に退避する為、消火活動が困難となり、津波浸水を免れた場合でも火災被害が発生するおそれがある。 －断水や建物倒壊により消火水利が活用できない場合には、消火活動の支障となる。 －感震ブレーカー等の電気火災対策により、電気に起因する出火やそれに伴う周辺建物の焼失が抑制される。 ・火災旋風が発生するおそれもある。 (火災は季節・時間帯によっては、より大きな被害が発生するおそれもある。) ・太陽光発電システムが損傷し、出火要因となる。
津波火災による被害	<ul style="list-style-type: none"> ・津波により漂流するガスボンベ等からの出火、浸水による車両等からの出火によって火災が発生する。 ・津波により堆積した車の電気系統やガスボンベなどから発火して炎上する。 ・流出した屋外タンクからのオイル、ガスボンベやがれきなどの可燃物が燃えたまま津波に乗って漂流し、延焼が拡大する。これらの集積の密度によっては海上油面火災が形成され、燃えた船舶が延焼拡大をさらに助長する。 ・津波によって打ち寄せられた家屋などががれきが高台に堆積し、火のついたがれきから周辺のがれきへ燃え広がる。 －津波によって浸水した自動車(電気自動車のバッテリー等)や家屋の電気系統、太陽光発電システムから出火する。 ・山際の避難場所まで延焼するものや山林火災に発展するものもあり、一部の避難場所では再避難が必要となる。 ・がれきなどが障害となって消火できず、延焼が拡大する。

※赤字は県想定 (H25.5) からの追加箇所 (数値は、H25.5から変えていない。今後、修正予定)

3 建物被害の様相の記載イメージ

防災・減災対策	減災効果
<p>【事前対策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・建築物の耐震化 ・地盤改良、杭補強等の液状化対策 ・海岸堤防、防波堤、防潮堤等の津波対策施設の整備 ・津波対策を特に講ずべき施設(行政関連施設、学校、社会福祉施設、医療施設等)の耐浪化、配置の見直し ・津波リスクを考慮した土地利用計画の策定 ・土砂災害対策 ・電熱器具等からの出火を防止する感震ブレーカーの設置、安全な器具等への買い替え等の出火防止対策 ・空き家を減らす取り組みや、老朽化した空き家の維持管理 ・密集市街地の解消 ・燃料タンク等の安全対策 ・津波浸水域の建物の高台への移転 ・津波による漂流物対策 	<ul style="list-style-type: none"> ・強い揺れや土砂災害、津波による建物被害を軽減 ・出火や延焼を防止し、火災による焼失棟数を軽減 ・津波による建物被害を回避(高台移転)
<p>【応急、復旧・復興対策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国からの応急危険度判定士、宅地危険度判定士等の要員、資機材の確保 ・受援計画等の策定による人員確保策の検討 ・被害認定調査や罹災証明書交付手続きの迅速化 ・被災建築物、宅地の応急危険度判定等の体制整備 ・家庭用消火器等の消火資機材保有率の向上、消火訓練の実施等による初期消火成功率の向上 ・消防団員の確保等による消防団体制の充実 ・石油コンビナート等防災計画の策定 	<ul style="list-style-type: none"> ・危険な建築物への侵入による2次被害を防止 ・火災の延焼を防止

※赤字は県想定（H25.5）からの追加箇所（数値は、H25.5から変えていない。今後、修正予定）